

---

# サムライ・アタック

ダイナマイトドラゴン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

サムライ・アタック

### 【NNコード】

N6666X

### 【作者名】

ダイナマイトドラゴン

### 【あらすじ】

魔法が効かない統率された魔物達に襲撃され、サラティア王国は滅びの危機に瀕していた。王女ターニャは事態打開の為、「魔神召喚」を行う。しかし、現れたのは魔神ではなくただの人間だった。

サラティアの運命やいかに！？

自称「サムライ」日本の男子高校生吉岡法男が異世界で大暴れ！俺達の戦いはこれからだ！！

## 第一話 フロム・ジャパン

「魔神召喚は可能でしょう」

この部屋の管理人をしているエルフのミレーニュはそう言つた。  
魔神召喚。この国に伝わる秘術。約四〇〇年前、一度だけ成功したという。以来、一度も試みられなかつたその術は方法だけがサラティア王家に伝えられている。

「しかし、非常に危険です」

召喚した魔神とは契約を結ばなければならない。魔神が何を代償に求めるのかは分からぬし、魔神が気に入らなければそのまま殺されてしまうかもしねり。

「私としてはやはり思いとどまつて頂いた方が……」

ミレーニュはそう言つてくれたが、サラティア王国の王女であり最大の魔力を持つターニャは既に覚悟を決めていた。

意を決して扉を開ける。

初めて入るその部屋は薄暗く、部屋の向こう側はぼやけて見える程の広さだった。天井もかなり高い。壁の片側、かなり高い所に小さな明かりとりの窓があつた。

そのか細い光を頼りに中央に進む。

床にこれまた巨大な魔方陣が青く浮かび上がつていた。

ターニャはその前で跪き、胸の前で手を組む。目をつむり、心を落ち着かせ、呪文を詠唱し始める。

呪文が進むにつれ、魔方陣の青い光が強くなつていく。部屋の空気が変わる。何か邪悪な濃密な気配が強く感じられた。それが最高潮に達した時、ターニャは両手のひらを天井に向かつて差しあげた。

「サラティアの名の下、出よ、魔神！」

ターニャが叫ぶと同時に青い光が部屋の中を埋め尽くす。

そして、光が弱まり邪悪な気配も消えた。

そこに、居た。魔方陣の上に。

ターニャは思わず息を飲み込んでしまう。

そこに現れたものは自分の二倍はあるように感じた。実際にはそこまでではなかつたのだが、身長だけでなく広い肩幅や分厚い胸板が大きいという印象をさらに強くさせていたのだ。そして、その巨大な身体を包む服は見た事が無い形をしており、真っ黒であつた。中央のボタンだけが金色をしていて不気味に光を放つ。そして、その髪はやはり黒。中央に寄せ、前に突き出しながら後ろに流すとう見たことのない異様な髪型は威圧を感じさせられた。

そこまでだつたらただの人並み外れた身長を持つ奇抜な服装の人間と変わらないだろう。

だが、その目、その顔つき。眉間に皺が一本、彫りの深いその顔にするどい目つき。その目がターニャの方を見た。心の芯まで震え上がりそうになる。

「魔神」というものの恐ろしさをターニャは初めて実感した。

しかし、ここで逃げ出す訳にはいかない。ターニャは勇気を振り絞つた。

「魔神よ！ 我の望みはこの国の危機を払う事。汝の望みを申されよ。そして、我と契約を！」

ターニャは決死の覚悟で魔神の返事を待つ。

魔神は口を開かない。そんなターニャをじいっと見つめる。そして、何も言わないままターニャから目を離し、ゆっくりと辺りを見回した。その目が再びターニャに戻つてくると魔神はターニャの方に歩み寄つて來た。

ターニャは後ずさりしたいのを必死に我慢して魔神を見つめる。

魔神はターニャの目の前まで來ると足を止めた。

「もう少し詳しい話を聞かせてもらおう」

魔神の声は意外と若々しかつた。その声にターニャの緊張は少し解きほぐされ、これまでのいきさつを語り出した。

サラティア王国は山間の小さな国である。魔法が盛んで、そのおかげで大国にも引けを取らない程の力を持つている。城下街は城壁に囲まれ外敵を寄せ付けない。時に魔物も現れたりする事もあったが強力な魔法を持つサラティア軍に簡単に撃退されていた。国は永らく平和であつた。

しかし、それが一変してしまつたのだ。

一週間程前、ゴブリンを中心とする魔物の群れが街を攻撃し始めた。その魔物達には魔法が一切効かなかつた。戦いは常に劣勢となつた。そして魔物達の攻撃はついに城壁を突破するとこまで迫つていた。

「そして、自分達の力ではどうしようもなくなつたお前達は『魔神』を召喚しようとしたって訳か」「

その言葉に違和感を抱きながらターニャは頷いた。

「お願いです！私達に力を貸して下さい！」

「いいだろう」

魔神はあつさりと言つた。

ターニャはほつとすると同時に「契約」の事を思い出し気を引き締める。

「それでは、契約を……。あなたの望みを聞かせて下さい……」

またしても魔神はすぐには口を開かない。自分の胸より低い所にあるターニャの目をじっと見つめる。

ターニャにとつて魔神が口を開くまでの間は死刑宣告を待つ時間であった。

「悪いが契約は出来ない」

「え？」

ターニャには予期せぬ言葉が聞こえた。

「俺は魔神なんでものじゃなく、ただの人間だからな

「……？」

聞こえた言葉が上手く頭の中に入つてこない。

私は確かに「魔神召喚」の儀式を行い、成功させた。だからこの男がここにいるのではないか。しかも、この男は姿こそ人間と似てはいるが私達とはどこかしら異質だ。その異質さが「魔神」という存在なのだとと思っていた。しかも、…………しかも私の願いにうなずいてくれた…………。

扉が開いた。

ターニャの思考は中断され、そちらを見る。男も同じく入り口の扉を見つめる。

開いた扉から女の姿が現れた。

人間にしては華奢過ぎるそのプロポーション。ふわりとさらさらな金色の髪。こちらをうかがうその目は透き通った美しい青色。耳は細く尖っていた。そして貧乳だつた。ストンとかペタンとかの擬音がとてもよく似合う彼女は「森の妖精」と称されるエルフであった。彼女は総じて美しいとされているエルフ族の中でも飛び抜けて美しいだろう、見る者の魂を吸い付ける容姿であった。

彼女 ミレーイコは男の姿を見とめると体をこわばらせたが無事な王女の姿を見てほうつと息を吐いた。  
そして姿勢を正す。

「報告します！外の者より遠話が入りました。敵に正門を突破された、と」

まず、男が動いた。

「案内しろ」

そう言いながらも王女を置いて早足で扉へ向かう。ターニャは追いつき追い越す為には駆けねばならなかつた。

ミレー＝ユは扉を大きく開き道を空ける。

男はそんなエルフを一顧だにせず扉を抜ける。ターニャは複雑な表情を見せながら小さく余釈しながら駆け抜けしていく。

「せつ……」

成功したのですか？そんな言葉を掛ける暇はなかつた。ミレー＝ユは言葉を選び直した。

「（）無事で！」

その言葉にもう一度力強く小さな頷きを見せ、ターニャは男を追い越す。

「ただの人間なのでしょう？奴らには魔法は効きません。どうやって戦うというのですか？」

駆けながら問いかける。しかし、ターニャは男の力を疑っている訳でも見くびつていてる訳でもなかつた。既にこの男はこの状況を開してくれるのでと確信していた。

「この世界にも剣という物があるだろう？」

その物言いにひつかかりを感じながらも疑問に対する答えだけを口にした。

「はい！城門を出た所に用意させておきます！」

ターニャは遠話をどこかに飛ばしたようだ。男はそんな事に対して疑問をはさむ事無く付いていく。

狭く長い通路。魔方陣の部屋はこの建物、サラティア城の一番奥深い所にあつたのだった。長い距離を駆けた後、ターニャは最後の扉を開いた。

一人の召使い風の女が剣を持つて立っていた。ターニャはその女

から剣を受け取り男に渡した。

「これをお使い下さい」

男は黙つて受け取る。

「あの……、あなたは剣士なのですか？」

ターニャはためらいがちに抱いていた疑問を口にした。この男の

持つ雰囲気は気軽にものを尋ねる事を躊躇わせるものだったのだ。

「いや、サムライ武士だ」

どこか誇らかしげに、もしかすると照れくさそうに男は言った。

城門の前はきれいに石畳で舗装された広い一本道だった。遠くに巨大な門が見える。あれが突破されたという正門なのだろう。ターニャはそこを目指して駆けていく。

「あそこか？」

「はい！」

ターニャは駆ける。男はその背中を見つめた。  
「場所は分かつた」

「はい！」

ターニャは駆ける。男は少し困ったようにその背中を見つめた。

「もういい。あとは一人で行ける」

「はい？」

ターニャは振り向かず、駆けながら答えた。

「お前は戻れ」

「いえ！私も行きます！」

「魔法は効かないんじゃなかつたのか？」

男にはこの少女が魔法以外の力を持っているとは思えなかつた。

「はい！効きません！」

「じゃあ戻れ。お前は戦えないのだろう？」

「いえ！戦えませんがあなたの盾ぐらいにはなれます！」

既に無いと思っていた命。命を捨てて召喚に挑んだはずであったが現れたのはただの人間だつたという。しかし、その、ただの人間は助けてくれるのだという。ならば私は私に出来る事、私がこの国の為に、この男の為に出来る事をやりにいこう。たとえ、それが一太刀を防ぐだけの事であつても。

ターニャは駆ける。男はその背中を見つめる。

そして、その襟首に手を伸ばした。

「きやつ！」

軽々とその体を引き寄せ耳に口を近づける。

「ありがとう」

男はそう言つた。微笑んでいた。その目は優しくターニャの目を覗き込んでいた。ターニャは間近でその顔を見てしまつた。胸が鳴つた理由は何なのだろう？ そう思つた瞬間ターニャの体は大きく後方へ投げられていた。

着地。衝撃を逃がす為にぐるぐると後転する。その動きは俊敏で、なるほど、王女らしからぬ、いちどきりの盾にはなれそうだつた。立ち上がり自分を投げた男を睨みつけようとしたら視界が真っ黒になつていた。焦つた時にはもうその服は自分に覆い被さつていた。服からようやく顔を出した時、

「預かってくれ！」

豆粒みたいな背中がそう言つた。

刃と刃がぶつかり合う音。そこには鎧をつけた巨大な獣の集団が剣を振るつていた。

豚のような鼻を持ち邪悪な小さな目、頭には一つの小さな角。体は人間の倍はありそうなその魔物はこの世界では「オーク」と呼ばれる凶悪な魔物であつた。

その全てのオークの額には黒く十字架の形に奇怪な紋様があつた。

対する人間は一体に対して数人がかりで。しかしそれでもいつな  
ぎ倒されるか分からぬ程の劣勢。

男は剣を鞘から抜く。

一番近くにいたオークは向かってくる男に気がつき剣を向けよう  
とした。

が、遅すぎた。

男は間合いに入つた瞬間オークの首を胴体から離していた。

崩れおちる巨体。そのオークと戦っていた兵士達は呆然と男を見  
る。周りのオーク達や兵士達も男に気づいた。オーク達は新たな敵  
を一番にやつつけてしまわないといけない存在だと認識したようだ  
った。戦っていた兵士達をはね除け、すり抜け、男に殺到する。兵  
士達は見慣れぬ姿といきなりの状況にどう判断していいかわからな  
い様子だった。

オークの剣が男の頭目がけて振り下ろされる。

紙一重。

ぎりぎり、という意味では無く必要最小限。かわした先では振り  
かぶつていた。振り下ろす。それの一一番近くにいたオークが真つ二  
つになつた仲間を認識した時には男はその左、剣を持つていない方  
に移動していた。

切る。

次々と斬つしていく。

兵士達は自分達のすぐそばでオークをなぎ倒していく鎧も着けな  
い、見慣れない服を着た巨漢をぼうっと眺めるしかなかつた。  
あつと言つ間に立つているオークはいなくなつた。

「あ、あの、あなたは……？」

兵士の一人が男に声を掛ける。

「戦いは終わつたのか？」

男が返すとその兵士ははつとなつた。今の状況を思い返したのだ  
らう。

「今、私達が戦つていたのはオークという敵の中でも強力な魔物で

す。そいつらに城門を突破されたのですが門の外ではゴブリンという敵の主力が押し寄せていました。別の部隊がそれに応戦中です」

男は頷き、駆け出す。

その場にいた兵士達もその背中を追つて駆け出した。

「ゴブリン達は数だけは多いものの難敵ではない。十数体のオークを一瞬で撃破した男も加わった事もあって、程なくサラティア軍は敵を壊走させた。

敵の姿が見えなくなるとサラティアの兵士達は見慣れぬ男の方をみる。助けられた事実とその奇妙な服装、巨大な体、凶悪な顔という自分達とは異なっているという意識が行動を迷わせていた。男の方もそんな兵士達の様子を眺めているだけで自分から話し掛けることも歩みよる事もない。

そんな中、一人の兵士がその男に歩み寄つて行つた。オーク達の戦いの後、男に話し掛けたあの兵士であつた。

「ありがとうございました。あなたのおかげでこの国の危機はひとまずは回避できたようです」

そう言って頭を下げる。男も返礼した。

「私はサラティア軍親衛隊隊長のアトロス。聞きたい事はいろいろありますがまずは城に帰つて一休みとしましょう。ご案内いたします」

親衛隊の隊長アトロスは兵士達に厚く信頼されているようだつた。アトロスが男に歩み寄つた時から周りの兵士達から不安な色が消え、成り行きを見守るようになつていた。

アトロスはそんな周囲をぐるりと見回す。

「皆、この戦いは我々の勝利だ！ 帰還するぞ！」

おおー、と兵士達は鬨の声をあげた。

男の事は親衛隊長に任せたければ安心だ、とばかりに口走るやう

と城門へと向かう。

「では、こちらへ

アトロスは男を促し歩き出せりとした。その背中に声が掛かる。

「アトロス隊長」

アトロスは振り向いた。男と目が合つた。男は小さな笑みを浮かべていた。

「俺の名前は吉岡法男」

アトロスにも笑みが浮かぶ。

「よろしく、ヨシオカ」

手を差し出した。

差し出された手を握った。

城門で出迎えたのはターニャともう一人。法男に剣を渡した女性。ターニャは泣きそうな怒つたような嬉しそうなほつとしたような複雑な顔で黒い服を抱え、法男を睨んでいた。

怒るべきか礼を言うべきか喜ぶべきか毅然とした態度をとるべきか、近づいて来る法男にどんな態度を取つたらいいのか決められない。が、隣の男に気がつき、そちらに声を掛けて結論を先延ばしにする事にした。

「お兄様、ご無事で」

「おう、ターニャ。敵はこちらのノリオ殿のおかげで撃退出來た。心配させたな」

「え……？ ノリオ？」

その言葉にターニャは戸惑い、法男を見る。

「紹介したいのだが……何と言つか……」

ここまで歩いて来る間、質問者は法男でアトロスは答えていただけだった。まだ、法男には何も聞いていない。分かつてているのは法男がこの国について、いや、この世界について何も知らないという事だけであった。

「あ、あの、この人は……」

ターニャもまた、何と言つていいやら分からぬ。

二人は続ける言葉を探す。

法男はそんな二人を黙つて見ている。

何とも言い難い雰囲気に助け船を出したのはターニャの横に立つ

ている女性だった。

「この方には来賓用の浴室を使って頂いたらよろしいのでしょうか？」

法男もアトロスも全身返り血にまみれていた。

「あ、ああアラミア。すまないがこちらの、ヨシオカ・ノリオ殿を

浴室に案内してくれないか。ターニャ、私も体を流してくれる。話は後で

ターニャは頷いた。その間にどう説明するのか整理しておこう。  
そうだ、お父様にも報告しておかなければ。そして、この自分が召喚してしまった、自分を投げ飛ばした男に対する気持ちも整理しておこう。

「それでは、ノリオ様、」ちらく、

ノリオは頷き、アラミアの後に続く。ターニャの方には一瞥もしない。

ターニャはその背を法男の学生服をぎゅっと抱きしめながら見送つた。

浴室は広々としていた。銭湯とまではいかないが旅館の家族風呂ぐらいはあったであろう。体を洗い、浴槽に浸かると戦いで疲れが取れていくみたいに感じた。

普段よりもかなり長く浸かつて堪能した後、湯船を出た。

脱衣場には鏡があった。法男が見慣れていた鏡よりかははっきりとは写らないものではあったが、十分にその役割を果たすものであった。

体を拭き終えた法男はその前に立つ。

「……」

ポマードは、無い。

いつもローザントに決められていた長い髪は収まり無く、たれ下がっている。

「……」

髪を両手でかき上げ纏め、後頭部から垂らしてみる。

「……」

ちょんまげ。

武士と名乗った自分にふさわしいような気がした。角度を変えつつ自分の姿を確認していく。

悪くない。よし、これでこじつけ。髪をとめる物がいるなと思った時、扉が開いた。

「ノリオ様、お着替えをお持ちしました。少しこもれませんがサイズの合うものが用意出来るまでこれで我慢して頂けますか」アラミアだった。今は頭を伏せて居るが、さっき入ってきた時は目が合っている。

「…………」ありがとう、そこに置いておいてくれ「手を離し、常人ならば耐えられないような恥ずかしさを押し隠して法男は言った。

扉を開けるとアラミアが立っていた。

すでに心を落ち着かせ終わっていた法男は動搖しない。

「それではお部屋に」案内します

アラミアの言葉に落ち着きはらつて頷き、歩き出した背に続く。

「あの、」

アラミアが歩きながら振り向き声を掛けた。

「髪を止めるものをお持ちしましょ」

「いや、いい」

間髪入れないどこのかうかに被せて法男は断る。それは法男の心のうちを顕わにする行為だった。体は巨大だとはいえ、法男は高校一年生。まだ少年と呼ばれるべき年齢だった。未熟だと説るのは酷だろう。

しかし、それはアラミアを動搖させるものだった。

アラミアはすでにターニャから法男が出現した経緯を聞かされてい。そして、帰還した兵士達から法男の鬼の如き戦いぶりも。法

男はこの国にとつて救世主となるに違いない存在だとアラニアは認識していた。

そんな大切な人を自分のせいで傷つけてしまったのかもしれない。怒らせてしまったのかもしない。なんとか法男の機嫌を取らなければ。

歩きながら考える。

しかし、なんと言つてよいやら分からない。  
とてもよく似合つてましたよ。

すっごく大きかったです！

ムキムキでステキでした！！

思いつくどの言葉にも法男の機嫌を直させるような効果があるとは思えなかつた。結局何も声を掛けられないまま部屋についてしまつた。

「当面こちらの部屋をお使い下さい」

法男を部屋の中へと案内する。

「来客用の部屋ですので一通り必要なものはすでに揃つているとは思うのですが、何か欲しい物があれば私に申しつけ下さい」

法男は頷く。その表情には動搖も不機嫌さも現れていない。しかし、アラニアは不安なままだつた。出て行くこともせず法男を見つめる。法男も何を言うでもなくアラニアを見る。

「あの、」

「うむ」

アラニアは勇気を出し、口を開いた。

「ノリオ様にも『自分的事情がお有りかとは思います。ですが今、この国は恐ろしい魔物に襲われ、滅びの危機に瀕しています。ノリオ様のお力が必要なのです！』どつか、『自分的世界にお帰りになる前に、この国にお力を貸し下さい！』

「……」

法男はその言葉に思いもかけず面食らつてしまつた。帰る前？

帰る？

どうやつて？

今の今まで浮かばなかつた事柄だつた。

何も言わない法男にアラミアの不安はせらに大きくなり言葉を続ける。

「わ、私に出来る事なら何でもしますから！」

そう言つとアラミアは自分の服に手をかけた。少年である法男にもその意味は分かる。法男はアラミアの顔をじつと見つめた。いや、正確には視線をアラミアの顔に固定しながら意識はその下にあるはだけた胸元に集中していた。期待を込めながら。

アラミアも法男の視線を受け止め、潤んだ瞳で見つめ返す。実は一方通行だつたのだが。

やがて、それ以上アラミアは動かないと言つた法男は諦めて口を開く。

「いいだろつ」

「え？」

アラミアの目が輝く。

「この国を襲う脅威が去るまでは決して帰らないと約束しよう。俺に大した事ができるとは思えないがな」

「あ、ありがとうございます！」

アラミアは乱れた着衣を直しながら嬉しそうに言つ。

「あ、あの、もうしばらくしたら会議がありますのでそれまではここでおくつろぎ下さい！あ、私、お茶をお持ちしますね！」  
「ぱたん！　ぱたぱた……。

法男は閉まつた扉を見つめながら考える。

帰りたくても帰り方が分からぬといふ事を伝えた方がいいだろうか？

法男は先ほどの一幕を思い返す。

「いや、やめておこづ。

もしかしたら、さつきのような展開がまたあるかもしれない。自分からせまるなんて出来ない少年の法男はそう考えた。

部屋の中には長細いテーブル。一番奥には初めて見る王冠をつけた壮年の男。その両隣にターニャとアトロス。そして、いかつい男やら老けた男やらが数人続く。その数人は戦場に出ていたいかつい顔のトレバン将軍を除いて皆一様に入室してきた法男を見て目を丸くする。

今はこの世界によくある服を身につけてはいるが、やはりその身長は初めて見る者を圧倒せざにはいられないようだった。ただ、ターニャを脅えさせたその凶悪な容貌は長い髪が頭の下まで垂れ隠し、いくぶん和らいでいる。

一緒に入ってきたアラミアは入り口に一番近い席を法男に指示示し、一礼して退室した。

法男は座らず奥の人物を見る。

「事情と名前は既に聞かせてもらいました。ヨシオカ・ノリオ殿、座つて下さい」

王冠をつけた最奥の男が法男に言葉を投げ掛ける。法男は言われるまま、会釈して席についた。

「私はこのサラティア王国の王、ポトロス。このターニャの親でありその行動を許可した者です。全ての責任は私にあります」

隣のターニャがビクリと肩を震わせた。法男は状況を理解した。

「不思議な事だつたとは思つが俺の出来る事はさせてもうつもりだ」

「感謝します」

ポトロスは微笑んだ。ターニャはほつと息を吐く。

「我がサラティアの主たる戦力は魔法を使う部隊でした。しかし、攻めて来ている敵に魔法が効かない今の状況ではこちらのアトロス率いる親衛隊が一番の要となります。ノリオ殿には彼の部隊に所属して頂き、彼と行動を相談して決めて下さい」

「承知した」

法男はアトロスを見た。アトロスは微笑み、よろしく、とでも言うように会釈してきた。法男も表情を緩め、頷き返す。

ターニャはそんな二人を複雑そうな目で見ていた。

会議が終わった。

部屋を出る時、いかつい顔のトレバン将軍とアトロスに呼び止められ、次の日以降の打ち合わせが行われた。

「……と、いう事なので招集がかかるまでは自由にしてもらつてかまわない。まずは剣と鎧を用意するといいだろ? 明日、私がアラニアが案内しよう」

それでは、遅くまですまなかつた。ゆっくり休んでくれ。と、言い残し一人も部屋を出ていった。入れ替わりにアラニアが入つてくる。法男はその後ろに小さな影を見つけた。ターニャだった。

「部屋への道は覚えている」

ターニャの方は見ず、アラニアに言ひ。

「それでは案内は不要という事で。それと、ターニャ様がお話が、との事なのですが」

法男はターニャを見る。

巨大な、具体的に言うと一〇六センチの法男の胸にも届かない小柄な身体。顔つきにはかなり幼さが残る。十七歳の法男から見ても子供という印象が強い。年頃の法男にとっては、既にあまり興味の無い相手だった。

一方、隣に立つアラニアは一十を超えているであろう。均整なプロポーション、品があり理知的な美しい顔立ち。なんとか自然さを装いながらお近づきになりたいと思わせる、清楚さと可愛らしさと色香を併せ持つ魅力的な大人の女性だった。

しかし、ターニャは自分を召喚し、自分が放り投げてしまつたと

いつ強い関わりを持つてしまった女の子である。

「あ、あの……」

小さな声で話しかけてくるターニャになるべく柔らかく頷き、続きを促す。

「本当にすみませんでした」

法男は頷く。もう、すでにどうでもいい事ではあったが、この少女の気がすむのなら付き合おう。

「それで、あの、何か私に出来る事は無いでしょうか？」

法男は考える。別に自分にして欲しい事は無い。だが、この場を無難に乗り切らなくてはならない。隣に気を引きたい女性がいる。

「お前は魔法使いなのだろう？」

「」の問いかけに意味は無い。ただの突破口である。

「は、はい……」

ターニャは苦し紛れの言葉だとは思わず殊勝に頷き、真摯に次の言葉を待つ。

「俺は剣士だ」

「はい」

「」に来てようやく法男にこの会話の着地点が見えた。

「ならば、お前には俺に出来る事なんて無いという事が分かるはずだ」

「え……？そ、それでは」

突き放すよくな言葉に動搖し、ターニャはさがるよくな声を出してしまつ。

「だが、お前にはお前にしか出来ないこの國の為にするべき事があるはずだ」

「あっ……」

この人はさつきの会議中、自分の出来る事をすると言った。自分の役割を果たす、と。ならば私も私の役割を果たさなければならぬ。この國の王女として、この國の第一王位繼承者として、この國最大の魔力を持つ魔法使いとして。それは何か？ 那はこの人に

尋ねる事は出来ない。自分で見つけるしか無いだろう。

ターニャは法男の苦し紛れの適当な言葉に回答を見つけ、晴々とした表情になつた。

「ありがとうございます！…でも、もし、何か困った事があつたら何でも言って下さいね！…ぜつたい力になりますから！それじゃ、おやすみなさい！」

少し頬を赤らめながら手を振り振りターニャは退室していった。  
どうやら想像以上に上手くこの場を乗り切つたようだ。法男は残つたアラミアを見る。アラミアは感心したような、羨望の眼差しで法男を見つめていた。

法男は得意になり、期待を込めてアラミアが口を開くのを待つ。  
「それでは、長い一日だったでしょう。ゆっくり寝所にてお休み下さいませ」

暖かく、優しく、気遣いに満ちた表情でそう言い、深々とおじぎをされ、法男は自分にあてがわれた部屋に戻るしかなかつた。

「でけえな、おいつ」

そう言つた男は丸かつた。年老いたドワーフ。名をブランといつ。ここ、サラティアの王都サラティスで古くから鍛冶屋をしている。

「こんにちは、ブランさん。この人は……」

「ああ、知つてる知つてる。ターニャ王女が魔神と間違つて召喚しちやつたんだろ？町中その噂で持ち切りだよ」

「ど、どこから……？」と、アラミアは焦つたが、ターニャが魔神召喚の儀式をやるのでは、とは前々から至る所で囁かれていた事だ。突如出現した巨大な、異様な服装をした男を見れば憶測だけで容易に到達する推論だった。

「いやあ、しかし、ターニャちゃんが魔神と間違えたのも無理無いね。こりや、初めて見た奴は間違いなく魔神だと信じ込んでしまうだろうよ」

ブランの遠慮の無い率直な悪口にアラミアは焦り、なんとか「まかそうとあわあわと手を動かす。しかし、ブランの口は止まらない。「そうだ、国が正式な声明で『王女の召喚は成功し、巨大な魔神が現れました』と言えばみんな信じるよ。帰つたらポトロスにそう言つといてくれ」

わつはつは、ブランは楽しそう。

あわわ～……、アラミアは慌てる。おそるおそる振り向くと、法男は苦笑していた。

ほつとしたアラミアはブランをきつと睨みつける。

「ブランさん、いい加減にして下さいー温厚な私もしまいには怒りますよ！」

「ごめんごめん、全く悪びれない態度で、ブランは謝つた。しかし、それで満足したアラミアは用件の方を切り出した。

「こちらの、ヨシオカ・ノリオ様に合つ剣と鎧を作つて欲しいので

すが

ふむ。予想はしていたら、その言葉を聞いて初めてプランは表情を引き締めた。腐つても年老いてもドワーフとしては変わり者だつたとしても現役の鍛冶職人である。仕事に向かう時は常に真剣であつた。

「ヨシオカ」

「つむ？」

法男は察し、アラミアの前に出る。アラミアも邪魔しないよう法男の影に入る。

「こちらの剣を使ったそうだな」

「つむ」

「使い心地はどうだった？」

「軽い」

「ふつ。ぶあーはつはつはつは。」プランは笑う。

「そりやまあ、その体じゃあねえ。この国どの剣も軽く感じるだろつよ。三本ぐらごまとめて握ればちょつと良かつたんじやねえか？」

「わつはつはつはつは。

大丈夫。こんな態度であつたとしても不面目だつたとしても口は悪かつたとしてもふざけていたとしてもプランは真剣である。例え真剣じゃ無かつたとしてもなんとかなる。

「後は？」

「柄の部分が短い。俺が使つていた剣術では両手で、離して、握る」  
こいつ、こんなふうに。法男はエアー竹刀を握り、プランに示す。

ほう。プランは興味を引かれたようだ。長い木の棒を取り出して來て法男に渡す。自分が持ち易いのはどの長さだ？ 扱いやすい重さはどれぐらいだ？ プランは今から作る剣のイメージを具体的にしていく。

「三日くれ

「ありがとう、ブランさん！」

結局、法男用の剣の製作にめどはついた。なんとかなった。アラミアも不安が消え、ほっとした様子だった。

「じゃあ、次は鎧ですね」

「えつ？」

「え？」

「いや、待ってくれアラミアちゃん。今から今まで作つた事が無いような剣を作るんだ。鎧までは神経がまわらねえ」

ちっ。

使えねえ。なんてアラミアは思つよつた女性では無かつた。

「はあ……、しうが無いですね。剣を作り終えるまでは他を当たつてみます」

肩を落とし、心底がっかりした様子を見せ、相手にブレッシャーを与えるような女性だった。

「わ、悪いな。きつちり剣を仕上げたらその時また鎧の方にも取りかかせてもらうからよ」

締めの言葉はもちろん本人だ。

「感謝する、ブラン」

サラティスは城塞都市である。城壁で囲まれた街の中にまた城壁で囲まれたサラティア城がある。

いきなり戦時中となつたこの状況下。避難する者もいたが、まだまだ少數に止まっていた。いつも隠れ、逃げれるように備えてはいても通常どおりに店を開いてる者の方が多かつた。

「この街で一番大きい武器屋がここなんですよ」

法男はアラミアとのランデブーを満喫していた。街行く人々は巨

大きな身体の法男をぎょっとしたり目を丸くして見つめるが法男は気にならないようだった。慣れているのだ。「元の世界でもそうだったのだから。

「やっぱりサイズ、無いですね……」

この世界の身長分布はほぼ現代日本と同じぐらいである。通常、一〇六センチの身長に合つ鎧なんて作られる事は無い。

「一応、何件か回つてみましょつか」

法男は頷く。このランデブーの間、ほとんど法男は喋っていない。無口なのは法男がこの世界に召喚される前、日本で高校生として暮らしている時から同様であった。

巨大な身体。剣の道を極めるといつ「」の定めた目標の為、鍛錬に明け暮れ、同級生と関わりを持たない、寄せ付けない日常。剣道部にも所属せず、山の中で熊や猪相手に木刀を振り剣を磨いてきた。「どうします？代わりになるものでもさがしましょつか？」

「いや、鎧はもういい。それより頭に巻く布か何かあるとありがたい」

アラニアははつと法男の無造作に垂らされた髪を見る。そして、頬を赤らめる。そして、ほつとしたように頷く。

「それでしたらいろいろ揃っているお店を知っています。こちらへ二人でランデブー。

「ノリオ様、」

「うむ？」

「ノリオ様がいらした世界とはどのような世界だったのですか？」

「ああ、」

「はい」

「魔物なんていない、平和な世界だったな

「はい」

「戦う事なんてほとんど無かつたな

「はい」

「だが、争いはあった

「……はい」

「それで、魔法なんてものは無い」

「はい」

「その代わりの、道具がいろいろあった  
どんどうな？」

「遠くの人と、魔法を使わず話す道具とか

「へえ、道具で」

「空を飛んだり」

「それは……魔法でも出来ませんよ。ノリオ様のいた世界、こことは全く違う世界なのですね」

「いや、こことあんまり変わらないわ」

「……ノリオ様がいた世界、何と言う名なのですか？」

法男は少し考えた。しかし、少しだけだった。

「日本」

ターニャは昼食後の時間を自室で過ごしていた。

広々とした部屋に女の子らしい装飾。その壁の一角落っこにこの部屋に似付かわしくない真っ黒な巨大な服がかかっていた。

椅子に腰掛け、法男から預かつた変形学生服をぼうっと眺める。

「……」

自分に出来る事。何だろう?

ターニャは考える。

……あの人はどこから来たんだろう?

この国の事の為に出来る事を考えようとしてるのに浮かんでくるのはあの男の事ばかりだった。

立ち上がり、壁に掛けてある学生服に近寄る。服をめくつた。裏地には奇妙な文字のようなものが白い糸で刺繡されていた。ターニャには読む事が出来ないその紋様は法男がやってきた世界を感じさ

せられるものであった。

……どんな世界なんだろ？

ターニャは法男と法男の世界に思いを馳せた。

「武士道と云ふは死ぬ事と見つけたり」

夕食は兵舎で取つた。法男は親衛隊に所属とはいへ、一介の兵士ではなく王家の賓客扱いをされている。食事も兵舎ではなく自室で取る事も出来たのだが法男が希望したのであった。王家の者用に用意された食事は豪華であろうが法男には量が不安だったのだ。大勢の集まる場所であつたら好きなだけ食べられるだろうといつゝイメージからだ。希望は叶い、満足した法男はすぐに自室には戻らず、中庭の片隅で筋肉トレーニングを始める。腕立て、腹筋、背筋、スクワット。並外れた量をこなしていった。

汗にまみれた法男は夜空を見上げる。

元居た世界と同じく輝く星々。しかし、見た事のない配置が異世界である事を実感させた。

そして、これまた同じくあるいはお月様。

この世界の月の表面ではウサギが餅をついていたようだった。

「ちつ

店に入つたとたんに舌打ちの音が聞こえた。

「いらっしゃい、でかいの。今日はかわいいアラニアちゃんは後から来るのかな？」

「いや、今日は俺一人だ」

これ見よがしに肩を落としため息をつくブラン。

そんなブランに法男はかまつてやるやぶりも見せず、用件を切り出す。

「頼んでいた剣はもう出来ただろうか」

そんな法男をかまつてくれよとかノリ悪いんじやねえのとかそついつた目でちらりと見た後、ブランは苦笑をもらす。

「ああ、これだ」

自分の身長よりも大きな剣をふりつきもせず法男に渡す。

自分の鳩尾ぐらーこの長さのその剣を法男は受け取ると握り具合を確かめる。

「良いようだ」

「振つたりしないのかい？おっと、やるんなら店の外で、だけどな」

「ああ。気に入った」

「そう言つてもらえると苦労した甲斐があるつてもんだ。その剣は俺が作つて来た中でも渾身の一振りだ。大切にしてくれ」

ブランは少し嬉しそうだ。

「約束しよう」

「頼むぜ。戦で使つたりせず、床の間で大事に飾つておいてくれよ」  
がつはつは。  
「いや、それは出来ない」  
はつは……。

「はあ、お前を見ると俺達を思へ出すぜ……」「うん？」

法男には言葉の意味が分からない。

「ああ、俺達ドワーフの事だ」

「なるほど」

まだ分からなかつたが分かつたふりをする。

「俺達ドワーフは、な。酒と鉄と沈黙を愛する種族なのさ。寡黙で変化を好まず、ただただ自分の技量を磨く」

田の前の男には全く当てはまらないな、と思つたが法男はあいづちを打つ。

「人間が嫌いでね。泣いたり笑つたり怒つたり忙しい連中の近くにいると落ち着かねえ、って。穴蔵に籠もつているのさ」「似てるか」

俺が。

「うーん?」

プランはニヤニヤと笑い、法男の顔を覗き込む。

「いや、やっぱり似てねえか」

お前も俺が愛する人間の一人に間違いねえ。

## 一一 終

「敵襲――――！」

見張りの声が響き渡る。

サラティア軍は陣容を整えつつ出撃する。もつ、この前のようにこの城門をぐぐらせるような事はしない。そう誓いながら。

親衛隊は先頭に立ち、難敵を探す。

他の隊にはかなりの数の志願兵が混じっている。俺達が一番の強敵に当たるんだ。それは命令ではなく、親衛隊全ての隊員の意志であつた。なによりも率いるアトロスの、俺がこの国を守る、という強い思いがあつた。

そのアトロスは先頭に立つ。サラティア軍の一番前だ。そしてその隣には鎧もつけず腕まくりをし、ちょんまげ姿の法男が立つ。遠くに人影が見えた。一体だけ。迎え撃つ兵士達は違和感を覚えた。

それは大きさだった。

「ジャイアント……」

どこから咳きが聞こえた。近づいて来るに従つて敵は一体ではなく、その足元に多数の見慣れた魔物達がいる事が分かつた。前回城門を破つていったオーク達、も。

兵士達に動搖が走る。目に脅えの色が浮かんだ兵士もいたかもしれない。

それも無理のない事であつただろう。

先頭に立ち、大股で近づいてくる凶悪な顔、巨大な身体。額に奇妙な十字が浮かぶその身体は通常の人間の十倍はあつたであろう。何人でかかるうが人間の力ではとても歯が立たないのはこれまでの経験で分かつていた。

魔法が効けば そんな思いをこにいる兵士達の何人の胸をよぎつたであろう。

アトロスはぎりっと歯を噛みしめる。妹の顔が浮かびそうになる。拳をぎゅっと握りしめる。落ち着いた声が聞こえる。

「俺があいつをやろう。他を頼む」

はつと隣を見た。脅えも動搖も一切感じさせない横顔があつた。

法男は剣を抜き放つとそのままジャイアントに突っ込んでいった。アトロスは制止しかけた手を止め、号令を放つた。

「ジャイアントはノリオ殿が倒す！我々はオーク共を片付けるぞ！」

一匹たりともここを通すな！」

その声が響いた瞬間サラティア軍から動搖が消えた。次々と剣を抜き敵に突っ込んでいく。

戦いが始まった。

ジャイアントが法男の方を見た。咆吼をあげる。最初に叩きつぶす敵だと認識したのだ。法男は間合いに入ろうと突っ込む。そこに拳が唸りを上げて迫ってきた。その巨大さからは想像も出来ないスピード。紙一重で見切るなんて二メートル四方はありそうなその拳相手では無理な話であった。

ノリオは間一髪横つ飛びに避ける。ものすごい風圧が体を横切つていく。体勢が崩れた法男に次のパンチが飛んでくる。後ろに下がるしかなかつた。ジャイアントは巨大な一步で易々とノリオを射程に捕らえると拳を放つて来る。

法男は転がり避ける。前に向かつて。

俊敏に立ち上るとそこにはジャイアントの巨木のような足。必殺の剣を横に一閃　かきん。乾いた音がした。それだけだつた。足が持ち上がる。法男は頭上から落ちてくるそれを必死で避けた。

周りで戦っている兵士達にも法男の劣勢さは一目瞭然であった。  
しかし、兵士達の心に絶望は迫つてこない。

なんと、あの男はジャイアント相手に戦つている。  
一人で。

我々は隊長の指示に従い、我々の敵を倒そう。  
そして、あの男の加勢に……。

その兵士達の意氣を嘲笑うかのような魔物の数であった。

法男は覚悟を決めた。

逃げているだけでは突破口は開けない。

俺が握っているのはブランが作ってくれた剣だ。

ジャイアントが咆吼する。次に繰り出してくる拳は気合いが乗つたものだろう。

凄まじい風を切る音と共に迫つてくる巨大な拳。

法男は避けない。

法男も裂帛の気合いと共にブランの剣をその拳に叩きつけた。

アトロスは裂帛の気合いと共にその剣をオーラに叩きつけた。

崩れ落ちる巨体。

次の敵、探そうとした時、金属が折れる音が聞こえた。

折れる剣。止まらない拳。

二メートル四方の塊が体にぶつかつてくる。  
肉の潰れる音。

骨が碎ける音。

自分を後方に持つていく力に逆らわないようにしてても。

法男は吹き飛んだ。

地面に叩きつけられる。

体は動かない。

この世界、魔法と言えば攻撃魔法である。治癒魔法は存在しない。遠話等、補助的なものは少数存在したが、特別な魔法と言えば特別な者しか使えない召喚魔法のみ。戦いにおいて役に立たなくなつたこの国の魔法使いは裏方にまわり、雑用をしていた。

飲み物を冷やし、部屋を涼しく保つコールド系の魔法使い。

風呂を焚き、肉を焼くファイヤー系の魔法使い、など。

今では自分達を守ってくれている大切な存在となつた剣を持って戦う魔法を持たない兵士達のサポートをしていた。

そして。

魔法を使う戦いにおいて最強の存在、最強の戦士、ターニャは物見台にて戦いを見つめるしかなかつた。

この戦いが始まつて以降、常に先頭に立つて戦う兄の姿を見続けてきた。

見るだけしかできない。

今日も、また。

肉弾戦においては人間では決して勝てないジャイアントが現れるところも。

その巨体に向かっていく小さなちょんまげ姿も。

剣が折れ、ちょんまげが吹き飛んでいく様も。

何も出来ない。

見ているだけしかできない。

何も。

見てるしか。

ターニャは悲鳴を上げた。

ジャイアントは確認しない。

なかなか攻撃が当たらなかつたが結局はいつも通り。自分の拳をくらつた相手がどうなるのかなんて分かりきつていて。さて、次は、首をめぐらした時、近くで意外なものが見えた。動かない物が動いたのだ。いや、立ち上がつたのだ。こちらを向いている。両手には何も持たずに。

ジャイアントは動搖しない。

今までなかつた事が起こつた。それだけの事である。戦いを続ければ、いい。

意識は、無い。

いや、ある。

よく分かりません。

体が動かなくなつた、そう認識した時、走馬燈のかわりにひとつ  
の言葉が浮かんだ。

「武士道と云ふは死ぬ事と見つけたり」

言葉の意味なんて知らない。

侍なんて見た事ない。

だけど。

だから、立ち上がつていた。

拳を握りしめて。

巨大な塊が迫ってきていた。どう動けばいいのか分かっていた。

体が動く。

渾身の力を込めて自分の拳をぶつけた。

空気が軋む。

次元だつてゆがんでいたかもしねりない。

片方の手がつぶれていく。

もう片方の手は押し込んでいく。

悲鳴らしい咆吼が上がる。

進む。

足が見えた。拳を振り上げ叩きつける。巨大な存在が沈んでいく。  
近づいてくる巨大な顔。

咆吼を上げたかもしれない。叫んだのかもしねりない。  
よく分からなかつた最後の一撃。

戦いは終わつた。

ゴンッ。硬い物がぶつかり合つ音が戦場を揺らした。

戦つていた手が止まり、そちらを見る。

巨大な拳と小さな拳がぶつかり合つていた。肩を引いたのは巨大な体の方。拳を押さえ、体をのけぞらせ悲鳴をあげる。ありえない光景だつた。何が起こつたのか、目に見える光景が頭の中に入つてこない。

ふらつと小さなちよんまげがふらつき巨人の足元に入る。手をついた、かのようになつたがその手は固く握られていたらしい。再び巨人の悲鳴が上がり、巨体が崩れる。ちよんまげは落ちてくる顔めがけて構えている。

「サムライ・パーンチ！」

良い声が戦場に響いた。

続いて大きな破壊音。

ちょんまげのアッパー・カットがジャイアントの顔面に炸裂していった。

ジャイアントは倒れ、動かなくなつた。その横でちょんまげも倒れ、動かない。

まわりは竦然としている。アトロスは田の前の大きな隙を見せているオーケを斬り捨てると法男に駆け寄る。数人の兵士がそれに続く。

「ヨシオカ！」

法男の手がピクッと動いた。ふうっと息を吐くアトロスであつたがそのまま法男が立ち上がろうとするのを見て慌てた。

「お、おい。無理するな。お前らノリオ殿を城に……」

「戦いは終わったのか？」

アトロスははっと周りを見渡す。剣戟の音があちこちで聞こえる。

「ああ、俺はすぐに戦に戻るがヨシオカは城へ……」

「無用だ」

片膝をついたまま立ち上がれないでいる法男は強い眼差しでアトロスを見た。

「ヨシオカ……」

アトロスは言葉を出せなくなつてしまつ。

法男は周りの兵士達を見回し、言つ。

「俺の剣は折れてしまった。すまないが誰か剣を貸してくれないだろうか」

「こ、これを……あつ……」

一人の兵士が剣を渡そうとし、その渡そうとした剣を見て躊躇いを見せる。

その剣はボロボロだった。刃は欠け、血糊に塗れ、ジャイアントを倒した勇者に渡すのは躊躇われたのだ。

「い、いや、誰かもつといい剣を」

「それを貸してくれ」

大きなボロボロの手が差し出された。

「あ、ああ」

ボロボロの鎧を着けた兵士が剣を渡した。

「ありがとう」

法男はその兵士に微笑みかけた。そして、その剣を支えに立ち上がりた。

「この戦い、勝とう」

一メートル六センチが声を掛ける。

「ああ、絶対に」

アトロスの顔が再び戦士のものになる。

「おう。そして、皆で凱旋だ」

「すぐに終わらせてくるぜ」

「帰つて皆でうまい酒でも飲もうぜ」

兵士達も口々に答える。

「いぐぞー！お前達！サラテイアの強さを見せてやれー！」

ジャイアントが倒れた事は魔物達に動搖を与えた。

そして、そのジャイアントを倒した男は倒れたジャイアントの傍らに胸を張つて立ち、こちらを睨みつけてくる。

魔物達に脅えとひるみが生まれる。

対してサラテイアの兵士達の士気は最高だった。

ジャイアントが現れた時点で負けはほぼ決定していたのだ。それがあの異世界から来た男が相打ちに持ち込んでくれた。残った敵は俺達だってなんとかなる。なんとかしてみせる。あのちょっとまげの犠牲を無駄にしてはならない。

法男の弔い合戦に兵士達は奮戦した。

最後の敵の影が消えた。

アトロスは法男を目指して走る。他の兵士達も。

法男の目の光が弱くなっていた。集まってきた兵士達を法男は見回し、その男を探す。

見つけた。

法男に剣を渡した兵士もまた、生き残り駆けつけていた。

法男は男に剣を返す。

「ありがとう。とても良い剣だつた」

男は受け取った。法男はそのまま前に倒れ込む。男の空いていた方の手と横から伸びて来た大勢の手で巨体を支える。

「お、おい、ノリオ殿を急いで城へ！」

いつもならアトロスの命令にすぐに従う兵士達もこの時ばかりは命令の前に行動していた。

「急げー！」

「死ぬんじゃねえぞ！」

「手が空いてる奴あ先行つて薬と酒を大量に用意しとけーー！」

「料理もなー！」

兵士達は法男をかついで城に駆けていく。

戦いは終わった。

## 第一話 ウエスタン・アタック

「魔神召喚を行います」

あの戦いから一日経ち、傷の癒えた法男の部屋を訪れたターニャはそう言った。

止めるべきだろうか？ 法男は考える。

また失敗し、俺のような人間が召喚されてしまうかもしね。失敗して現れた魔神にターニャは殺されてしまうかもしね。

だが、成功するかもしね。

この前の戦いを思い出す。結果的に勝てはしたが自分も瀕死の重傷を負ってしまった。もし、ジャイアントが一体だったら今頃全てが終わっていただろ？

自分は非力である。この国を救う事なんて出来はしない。この国の者の判断に自分が口を出すなんて出来ない。

「そうか」

ターニャは法男にどんな言葉を期待していたのだろう？ 法男の言葉を聞き、ほうっと息を吐く。そして、ふうっと息を吸い込む。「あ、あなたをもう、危険な戦いを必要とする、いく必要が、もう、あの、えーと……」

惜しかつた。

「条件がある」

そんなターニャに法男の言葉が降つて来た。

「え……？」

混乱してしまっていたターニャは何故法男に条件を出されなければいけないのか、なんて疑問を持つ余裕が無かつた。

「俺も立ち会わせてもらおう」

青く光る魔方陣。その前で呪文を詠唱するターニャ。少し離れて法男。そして、その隣にもう一人。

この部屋の管理人、エルフのミレー二ユだった。

今回の召喚に法男が立ち会つと聞いたミレー二ユは条件を出したのだ。自分も立ち会う、と。

法男は隣に立つミレー二ユを見る。

美しい。しかし、その美しさは法男の目には芸術品のそれとしか写らなかつた。しばらくその美しさを堪能してから視線を魔方陣に移す。

青い光は輝きを増す。

空気が濃密になる。

ターニャが叫ぶ。

「サラティアの名の下、出よ、魔神！」

青い光が部屋に満ちる。

法男もミレー二ユも目をつぶつてしまつ。

そして、光が消え、二人は目を開ける。

そこには。

思わずミレー二ユは息を飲む。

見上げる程に巨大な姿。法男が戦つたジャイアントとほぼ同じぐらいであろう。その体を包むのは鎧か皮膚か。青と銀に彩られ、不自然な程に美しい曲線と直線で形成されている。

その足は体に対して極端に大きく、前後に車輪のようなものがついている。逆にその腕は細い。片方の腕に奇妙な筒のような装飾がついており、その筒から太いひものような物が背中に伸びており、それが背負つているリュックサックにつながつていた。

巨体がリュックサックを背負つている。こつけいに聞こえるが、その黒光りしているリュックサックはとても格好良く様になつており、巨体によく似合つていた。

そして頭部。頭があるべきところには何も無かつた。代わりに、なのだろうか、胸の位置に昆虫の目を思わせる黒い半球状の物が付

いている。

あまりにも異様、異質。

ターニャは確信していた。ついに自分は魔神を召喚する事に成功したのだ、と。しかし、その自分が召喚した魔神に圧倒され、言葉が出ない。

震える心を必死に立て直そうとする。

ミレーヌは違和感を感じていた。現れたのは異界の住人ではなく、異界の置物なのではないか、と。

法男は思った。

(ロボット……)

巨大ロボ。ファイクションの世界ではおなじみの存在。田の前にあるものはそうとしか見えなかつた。

もし、その通りだとしたら確かめなければいけない事がある。

「魔神よ！」

ついにターニャは言葉を発した。かすれた、それでも精一杯大きな声で。

「我の望みはこの国の危機を払う事。汝の望みを申されよ。そして、我と契約を！」

応えは、無い。どころか、ぴくりとも動かない。

「魔神よ！」

なおもターニャは呼びかける。

「ターニャ様……」

ミレーヌはそんなターニャに声を掛けようと歩み寄る。法男も動いた。巨体の方へ。

「ノ、ノリオ」

その動きに気がついたターニャは不安げに声を掛けた。

法男は振り向き、力強く頷いてみせる。それだけでターニャは何も言えなくなってしまう。

不安そうに見つめるターニャの肩にぽんっと優しい手が置かれた。ミレーヌも微笑み頷いて見せる。任せてみましょ、と。

巨体のすぐ足元まで来た法男は見上げる。よく見るとほじいのよ  
うな物や、足場のような場所があり、胸の半球に繋がっていた。  
おそらく常用されるものではなく非常用のものだろひ。

法男は恐れる様子も見せず、力強く登りだす。

ターニャははつと息を飲むが、声を出す事はなく見つめ続けた。  
やがて、法男は黒色の半球にたどりつく。近くで見るとそれは半  
透明になつていて中が透けて見えた。

人影。パイロットはいたのだ。

若く見える。若いと言つよりも幼いと言つていいかもしない。  
その子供はコックピットに座つて寝ているようだつた。

法男はハッチをこんこん、と叩いた。中の男の子が目を開けた。  
「うーうわー！上面殿、私はサボつていたのではなく操縦席のメン  
テナンスをー！……お？」

少年の焦点がハッチの向いの法男に合つ。

「あれ？えーと……？」

「開けてくれ」

「え？う、うん」

声も届くようであつた。法男が身を離すとハッチは上に跳ね上が  
る。

少年の目に見慣れぬ風景が入つてくる。

「あ、あれ？ここは？」

「うむ。ちょっと立つてみてくれ」

「え？」

何の脈絡も無い言葉だったが、訳も分からず呆然としている少年  
は法男の言葉に素直に従つた。法男はそんないたいけな少年の腰に  
腕をまわし、肩に担ぎ上げるのだつた。

「ちょ、ちょつと？」

問い合わせてくる少年に何も応えず法男は降り始めた。

「どうやら今回も失敗だったようだな」

法男は果然と見つめ合つ三人に容赦の無い言葉を投げる。

「え？ それではこの子もノリオの世界の……？」

「いや違う」

あつさり否定する法男。

「おい、お前、この子ってなんだこの子って」

「え？ あなたの事なんだけど……」

急に食つて掛かつてきた少年にター二ヤは困惑する。

「おいおい、お前の方が子供だろ！ お前にくつだよー。」

「じゅ、十五歳だけど……」

タ二ニヤは何故だか法男の方をちらちら見ながら答える。

「うつ……ひ、一つしか変わんねえじゃねえか！」

「え？ 十四なの？ ……へえ」

それにしては幼いわねおほほといつ視線に少年はかちんと来たようだつた。

「ば、馬鹿にしてんじゃねえぞ！ 僕様はサウロス史上最年少で保安官になつた男。天才ウォー・ホース乗りと呼ばれたケイン・ウエスト様をなめんじゃねえ！」

「ほう。保安官」

社会人とは。法男は少年を見る目を変えた。

「おおよー！」

「ウォー・ホースとはあれか」

巨体を指す。

「おう！ あれこそが俺様の愛機、マッド・ダディの最新作、WH-

36『エクリオス』だぜ！」

「ほほう」

感心する様子の法男にケインは気を良くしたようだ。

「おう！ 聞いて驚け、こいつは可変型W・H<sup>ワード・ホース</sup>。長距離を走る時には変形し、より速く、サスの効いた快適な乗り心地を実現させたW・

## H乗り達垂涎の名機

「ほお」

「もちろん戦闘力も特上！左腕のレイル・ガンはけつこう遠い敵でも撃ち落とし、右腕のアーム・ガンは近い敵を打ち抜くぜ！」  
うんうん。

法男はかなり興味を持ったようだ。ケインの話を熱心に聞く。  
その横で唖然としながら一人の会話を聞いていたター二ヤだつたが  
そこまで聞いて口をはさんだ。

「あ、あの、あなた戦えるの？」

「戦える？何言ってんだ。保安官が戦えなくてどうすんだよ。日夜  
荒くれ無法W・H乗りどもをぎつたんぎつたんにしてやつてるぜ！」  
このエクリオスでな、と親指で巨大ロボを指し、ケインは得意そ  
うな顔を見せる。

「あ、あの、それだつたら私達に力を貸してくれない？」

「え？」

ケインはどういう事なのか分からぬ。

「ここはお前がいた世界とは違う世界でこの人は強い敵に襲われて  
困っている。それで、お前の力でそいつらをぎつたんぎつたんにし  
て欲しいそうだ」

法男が横から助け船を出した。

「違う……世界？」

「そうだ。この世界のどこにもお前が住んでいた国は存在しない

「強い、敵？」

「まあ、それは実際見てもらわないと説明し辛い」

「…………」

呆然とするケイン。

「お願ひ！私達の国が滅びそうなの！あなたの力を貸して！」

「……じゃねえ」

ようやく事態が飲み込めたようだ。ケインはぼつりと呟く。

「え？」

「冗談じゃねえ！何で俺がそんな事しなきゃなんねえんだ！俺は保安官だ！サウス地区の平和を守らなきゃいけないんだ！俺は帰る！」

「そ、そんな……」

激高するケインにターニャは涙目になってしまった。

「うつ……そんな目で見たつて駄目なものは駄目だ」

ケインは少し声を柔らかくして、それでもターニャの望みを突っぱねふいつと横を向く。

「ね、ねえ……」

なおもすがりつとするターニャの肩に大きな手が置かれた。

「あまり無理は言つな」

ターニャはびくつと振り仰ぐが法男の目は優しかった。

「で、でも……」

「彼には彼の事情というものがあるのだう。それに……」

法男は扉を指差した。

「あの扉はあのW・Hウォーホースが出るこは小さ過ぎるようだ」

「あつ……」

ターニャは扉を見つめる。そして、横を向き横目でじりじりを伺つていたケインの方を向く。さつと目をそらすケイン。そんなケインを見つめ、やがてはあつ、とため息をついた。

「分かりました。ウエスト、あなたには迷惑をかけてしまいました申し訳ありませんでした」

ターニャはケインに頭を下げる。

「い、いや、分かつてくれりゃいいんだよ」

ケインは頭をぽりぽりとかいて照れくわそうだ。

「それでは許して下さるんですね」

「ああ、ああ、もういいって。済んだ事は気にするな

ははつ。

ふふつ。

法男とミレーイコも照れくわそうに笑い合つ一人を眺め、やさしく微笑む。

争いは終わった。

「じゃあ、俺を元の世界に帰してくれ」

「えつ？」

「え？」

コトリ、お茶がテーブルに置かれる。

「ありがとう」

法男はカツフに手を伸ばす。その向かいでケインはぶすっとした表情で腕組みをしている。ミレーイコはそんなケインを気遣いながら自分も座る。

三人は魔方陣の部屋の隣に位置するミレーイコの部屋に移動していった。周りは本棚で囲まれ、ぎっしりと様々な本が詰まっている。書庫にテーブルとベッドが置いてある、といった印象だ。

ターニャはベソをかきながら、お父様に報告していく、と席をはずしていた。

「……呼びつけておいて帰し方が分からないうてどいつう事だよ」ボソッとケインが呟く。さつきさんざん怒鳴りちらしたのにまだ気がおさまってないようだ。

「すみません、ほんつとうにすみません」

ミレーイコは申し訳なさそうに何度も頭を下げる。

その様をケインは見てしまい、その美しさに心を奪われ見とれてしまう。そして、顔を上げたミレーイコと田代が合つてしまい、頬を赤らめ目をそらす。

「災難だつたな」

法男がなぐさめる。

「いや、お前、」

「おつと、忘れていたな。俺の名前は吉岡法男。よろしく」何か言いかけたケインを法男が遮る。

「ミシオカ？変な名前だな。どうちが名前？」

「吉岡の方だ」

「え？ そうだつたんですか？」

ミレーイコは驚く仕草も美しい。

「ああ」

「やっぱり異世界の方なんですね……」

ミレーイコは感心する姿も美しい。

「いや、ちょっと待つて。この世界はどの国も名前が先なんだ？」

「あ、ケイン様の世界では両方あるんですね」

「う、うん。もちろん僕はケインの方が名前だよ」

美しいミレーイコに話し掛けられ、ケインは赤くなつてしまつ。が、すぐにはつとして、きつと法男を睨みつけた。

「いや、そうじゃなくて、ノリオ、お前も召喚されたんだろ」

「ああ」

「だつたら何で帰れないってことの連中に教えなかつたんだよ」「うむ」

法男は腕を組み、目を伏せ、難しい顔をして黙り込む。ケインは法男の答えを待つ。が、法男はなかなか口を開かない。

「いや、だから何で言わなかつたのか聞いてんだよ！」しづれを切らしたケインが重ねて聞いた。

「うん？ うーん、聞かれなかつたし、」

法男は視線を宙の何も無い所を漂わせながら答える。

「そんな大切な事は自分から言え！」「俺は無口なんだ

「理由になんねえよ！」

「ま、まあ、ウエスト様、悪いのは私達なんですから、そのへんで……」

「いや、別に攻めているつもりは……あ、あの、お姉さん、」

「あ、私はミレーイコ。ただのミレーイコで、ファミリーネームはありません」

「あ、うん。ミラー、君さん、ずっと気になっていたんだけど、個性的な耳ですよね」

「あ、私はエルフで人間じゃないんですよ」

「エルフ?」

「はい、エルフというのは森と自然と音楽を愛する種族で……」

会議は踊る、されど進まず。

この部屋に入った理由は帰る方法を探す為、魔法との国の歴史に詳しいミラー、君に魔神召喚について詳しい話を聞いた、であつた。

「まあ、サウロスではW・H<sup>ウォーホース</sup>に乗れるかどうかが何より優先されるからな」

「でも、あなたみたいな幼い子供が……」

「子供じゃねえって！……そういえば、ミレーイコさんの歳ついていくつなんですか？」

「あ、六二八歳です」

「うえつ！？」

「意外だな」

「お前が十七だって事の方が意外だつたよー。」

トントン。

ノックの音がした時の議題は「サウロスの社会制度とミレーイコの個人情報について」であった。

「あ、どうぞ」

常に議題に入っていたミレーイコが答える。ドアが開き、しょんぼりとしたターニヤが入ってくる。ミレーイコは元気づけようと声を掛けようとしたが、続いて入ってくる人影に気づいた。それは、難しい顔をしたアトロスだった。そして、アトロスに続いて王冠をつけた威厳のある壯年が入つて来る。

「ポトロス陛下…こんなところまでわざわざ……」

ミレーイコは慌てて立ち上がる。ケインはもちろん座つたまま、ポカーンとポトロスを見ている。法男もケインに便乗して座つたままポトロスに一礼した。

ポトロスはその法男に頷き返し、ミレーイコに向かう。

「いや、ミレーイコ殿、お構いなく。あなたはこの国の大切なお客様だ。私に対する礼は無用」

そうは言われてましても、と椅子を引き、ポトロスに着座してもらつ。そして、お茶を入れますね、と隣の部屋に消えた。残るターニャとアトロスは座らずポトロスの後ろに立つ。このテーブルは四人掛けだった。

その時、ケインはすばやくセツキまでミレーイコが座っていた席に移動し、法男の肘をつつく。

「うん？」

（お、おい、この人陛下って……もしかしてこの国の王様？）

ひそひそ声で法男に尋ねる。

「うむ。このサラティア王国の君主、ポトロス王だ」

（げ、なんでそんなえらい人がこんなところに？）

「さあ？ しかし这里是サラティア城の一室。同じ屋根の下に住むポトロス王がここに来てもおかしくないかもしねない」

（そういう問題かよ！）

田の前で交わされる内緒話にポトロスは苦笑する。後ろに立つアトロスの顔からも深刻な色は消えていった。ターニャはまじりむき、居心地悪そうにしていた。

「おほん」

ポトロスがわざとらしい咳払いをするとケインはさつと黙り、背筋を伸ばした。

「初めてましてウエスト殿。私はこの国の王であり、あなたをミレーイコ呼び寄せたこのターニャの父親です」

「え？ ターニャって王女様なの？」

思わずケインは後ろでうつむいてるターニャに声を掛けてしまつ。ターニャは声を出す事無く小さく何度も頷いて見せる。

「話を続けても良いかな？」

すでにポトロスは王の顔から柔軟な普通の人の顔になっていた。

「は、はいっ、すいません！」

さつと背筋を伸ばすケイン。

「いや、あなたもミレー＝ユ殿と同じくこの国の臣ではない。私にそういうったかしこまつた態度を取る必要は無いよ」

ポトロスは微笑みながらケインに言つ。

「はいっ。……あ、いや、お、おう、分かつた」

ケインは喋り辛そうだ。

そこにティーカップを三つのせたお盆を持ってミレー＝ユが戻つて来た。ミレー＝ユは一つ空いている席と立つている一人を見て困った顔になる。

「あ、あの、アトロス様、どうぞお座り下さい」

実は王位継承権はター＝ヤが第一位でアトロスはかなり下の方であつた。サラティアでは血とともに魔力の大きさが王を継ぐ条件となつていたのだ。しかし、この場では地位よりも個人が大切なようになつてゐる。ミレー＝ユは感じ、アトロスを立てたのだった。それに、よくこの部屋に訪ねてくるターニャの事は友人に近い感情を持っていた。「ミレー＝ユ殿、お気遣いありがとうございます。ですが、私達はお茶を飲みに来たのではありませんから」

どうぞお座り下さい、と空いた席を手の平を上に向けて指し示す。

「でも……」

なおも躊躇うミレー＝ユにポトロスも声を掛ける。

「そのお茶はそちらのお二人に。さ、さ、どうぞどうぞ」

ポトロスにこつまで言われては仕方ない。ミレー＝ユは諦めて席に着く。

まともな人が出席し、踊り続けた会議もようやく進み出す。

かがり火。

「魔方陣がまたしても発動したようだ」

暗い洞窟を照らす。

「……魔神が？」

「巨大な影。

「いや、その気配は無い」

細身の影。

「なら、また失敗か」

見た目はゴブリン。しかしその大きさは通常のゴブリンの五倍はあつたであろう。

「しかし、先の失敗ではジャイアントを屠る男を出現させている」ほつそりとした身体に尖った耳。エルフ。闇色に染まつたエルフ。

「ならば次はジャイアント三体だ」

「大丈夫か？連戦は必要無いとはいえますがに三体はきついんじゃないのか？」

「誰にものを言つている？」

闇色のエルフは笑う。

「失言だった。お前は神になる存在だったなメドーシュ」ゴブリンキングは立つ。

「行くぞアーメス。貴様こそ術を失敗させないよう心しろ」ゆらり、何も無い所で影が揺れた。

「過去、魔神以外の存在を召喚した例を記述した物はありません」進んだ会議はすぐ壁にぶち当たる。  
「魔神が元の世界に帰る様子を詳細に書いた文献も残つていません」その人が召喚した魔神もいつの間にか消えていた。……の人と共に。

「ふつ、ヒミレーーー！」の田が遠くなつていく。

「ふうむ……」

ポトロスの顔が渋くなる。

ケインは自分の事が話し合われているというのを分かつても、

話の内容が分からぬので他人事のよつた気分で適当に頷いている。

「召喚、という魔法を詳しく調べ研究し、帰す為の術を新しく考案するしかない、か……」

「ポトロスはしばらく沈黙し、考えをまとめる。

「ミレーーー！ 殿、申し訳ないがあなたにその役を頼めないだろ？ つかミレーーー！」 はおだやかに一礼する。

「結果をお約束する事は出来ませんが全力を尽くしましょう！」

「ターニャ、お前はその手伝いを」

「は、はい！」

「アトロス、ウエスト殿がこちらでの生活に困らぬよう手配を」

「はっ」

「ノリオ殿、あなたはウエスト殿と立場を同じくする者。ウエスト殿の力になつて頂きたい」

「承知した」

「え？ こいつが？ と、ケインは不満そうな顔を見せるが。ポトロスの言葉に口答えなんて出来る訳がない。

かくして、会議は閉幕する。

「よう、人がせつかく作った渾身の一振りを真つ二つにした魔神さん。まさか、たつた三日後に全く同じ剣を作らされるとは思いもしなかつたぜ」

「儲かつたな」

「毎度……じゃねえよ！ 僕は商売人じゃなくて職人だ！」

「ふむ。代金を預かつて来ているのだが必要なかつたか」「毎度！」

法男はプランの店を訪れていた。

「うお！ 丸！」

小さな少年を連れて。

「ん？なんだそのガキは？」

「ガキじゃねえ！俺様は……」

かつて聞いた台詞が並ぶ。法男は聞いた事があるやりとりを聞き

流した後、ブランに代金を支払った。

「毎度」。お得意さんになつたお前にプレゼントをやる「ひ

ブランは手の平サイズの丸っこい金属プレートに皮のベルトを取り付けた物を法男に渡す。

「これは？」

「胸当てだ。お前、結局動き辛いってわがままな理由で鎧を着けない事にしたらしいじゃねえか。せめてそれで心臓を守るぐらいはしつけ。気休め程度のお守りぐらいな物だがよ」

ブランはちょっと照れくさかったのかもしれない。

「ありがとう。次の戦いが終わったら、この胸当てのおかげで命が救われたと礼に来る事を約束しよう」

「てめえは未来を予知でも出来るのかよ！」

「適当過ぎるだろ！」

笑いながらそう言って法男を叩いたブランはじいっと法男の顔を覗き込んだ。

「お前、えらいノリが良くなつたな。一回死んで人が変わつたか？」

「いや？変わつてないと思つが？」

「ふむ」

ブランは法男を見つめ、それからその隣のケインを見る。

「な、なんだよ？」

「いいや、別に」

ブランもケインを見る目が変わつたようだった。

「お前にも何か作つてやろうか」

「はあ？俺はW・H<sup>ウォーホース</sup>乗りだつて言つてるだろー。エクリオス以外必要

ねえ！」

「そのW・Hとやらがよく分からねえんだが」

ブランは首を捻る。

「ケインと共に召喚された武器だ。俺の十倍ぐら<sup>い</sup>いの大きさで、召喚された部屋から出せないでいる」

法男が横から口を挟む。ちなみに、一メートル六センチの法男に対し、エクリオスは約十五メートルであつた。

「ほう、ミシオカの十倍の大きさの武器……。見てみてえが部屋から出せないんじゃあな。まさか壁をブチ破るわけにもいかねえし」

「お、その手があつたか」

ケインはぽんつと手を打つ。

「やめとけやめとけ。お前そんな事をしたらいレーニュに殺されるぞ」

「うえ！？そ、やうなの？」

たじろぐケインにプランは大きく頷いて見せた。

「ああ。あの部屋をミレー<sup>ニ</sup>ュはかなりの思い入れを持つて大切にしているからな」

「知り合いだつたか」

「何ーお前、ミレー<sup>ニ</sup>ュさんとどうこう関係だよー。」

「んー？気になるのか？」

プランはニヤニヤとケインの顔を覗き込む。

「もちろんー！」

ケインはぐぐつとプランに迫る。

「なあに、ただの昔の旅の仲間だよ」

プランはニヤリ、ケインの肩を叩く。

「よしー！」

「それにいい事を教えてやるつ。あいつな、今、付き合つてている恋人はいねえ」

「おおー！」

ケインの目が輝く。

「エルフに年の差なんて言葉は存在しない」

「うんうん」

「お前みたいな男なら頑張れば手が届くんじゃないか？」

「おう！ノリオ、俺は用事を思い出したから先に帰る。じゃあな」  
ショットと手をかざしケインは店を出て行った。

法男はケインを見送るプランを見る。その田には子供をからかつているだけのものではない、真剣な気持ちも混じつているような気がした。

法男がミレー＝コの部屋を訪れた時、ミレー＝コとターニャは分厚い本を難しい顔で読みふけつており、ケインは床に寝つ転がつてお絵描きをして遊んでいた。

法男に気がついたミレー＝コは立ち上がりつとすると、法男はそれを制した。

「悪いが、俺も勝手に寛がせてもらつてもいいか？」

ミレー＝コはちらりとケインを見て微笑み、頷く。ミレー＝コが再び本に向かうのを確認し、法男は本棚に向かつた。その中の一冊を抜き出し、開く。

読めない文字で埋まっている。

パラパラとめくる。

挿絵があるページがあつた。奇怪で不思議な見慣れない絵。文字を読めなくとも挿絵を眺めるのは楽しかつた。法男はパラパラ、パラパラと挿絵を探しながらページをめくつていく。

（お、おい、お前、この文字が読めるのかよ）

いつの間にか隣に来ていたケインがひそひそ声で話し掛けてきた。

（いいや。絵を眺めていた）

（なんだよ、びっくりさせるなよ）

（お前も読めないのか）

（当たり前だろ？違う世界にいたんだ。読めなくて当然）

馬鹿な訳じやないぜ？ と、ケインはあごを上げる。

（ふむ）

そんなケインを見つめ、法男は考えに沈む。

(おい、どうかしたか?)

(いや、それにしては言葉が通じるのは不思議だな、と)  
(あつ……あ~、ほら、俺って天才だろ? 聞いた瞬間言葉を理解して無意識のうちにこいつちの言葉を喋っていたんだよ、うん)  
(なるほど、お前にについてはそつなかもしれない)

(だろ?)

(だが、俺の頭の方はあまり……)

法男は学校での成績を思い出していた。それはとても残念なものだった。

(なるほど、不思議だな)

ケインはとてもいい笑顔になった。

「ターニャ様、これを……」

緊張をはらんだミレーイコの声が聞こえ、法男とケインはそちらを向く。

そこにはミレーイコに差し出された本をターニャが見つめている姿があった。読み進めるつむじ、みるみるターニャの表情は険しくなっていく。

法男とケインは静かに歩み寄り、そつとターニャの読んでいる本を覗き込んだ。挿絵が見えた。奇怪な文字が十字を作っている。

法男には見覚えがあった。

魔物達の額に浮かんでいたあの模様。

「その本によると……」

法男達に気がついたミレーイコが説明してくれる。  
デビル・スタンプ  
悪魔の刻印。

そう呼ばれていた太古の術だという。その術を受けた者は術者の言うままになり、魔法を一切受け付けない身体になる。術は受け

る者の額に手を当て、術者の中にいる魔を直接注ぎ込むといつもの  
だった。

魔。

魔法とは全く異なる物。その魔を注ぎ込まれる者は発狂するほど  
の苦痛を感じるという。受ける者に非常な苦痛を与える非道な術。  
それは今では存在しないはずの「魔」と呼ばれた種族にしか使え  
ない術であった。

「ふむ。敵は魔か」

法男の言葉にターニャが青ざめる。

「そ、そんなはずは……。魔なんて伝承にしか残ってない、今で  
は存在しない種族なんだし……」

「俺達はその伝承にすら載つてない存在なのだろう、だが、いじつ  
て確かに存在している。なあ、ケイン」

「え？ うん、そうだね」

ケインは本に書かれていたのが自分の帰還とは関わりが無い、よ  
く分からぬ話だったので既に興味を失っていた。

その夜。

トントン、ノックの音がした時、法男はテーブルを窓際に移動さ  
せて月を見ていた。

「どうぞ」

入つて来たのはケインだった。心なしか元気が無いように見える。

「どうした？ 眠れないのか」

「うーん……そんなとこかな」

ケインもテーブルの向かい側に座り、窓の外を見る。  
まあいいお月様。

ケインは頬杖を突いて月を眺める。

「なあ」

「うむ」

法男も視線を月に戻す。

「（）」、俺が住んでいた世界とは違う世界なんだよな

「つむ。実は俺はこの世界の事はあまり知らず、お前の世界の事は全く知らない。もしかしたら俺の思い違いだったかもしれない」「いやあ、悪い。俺の世界の世界地図にはこんな国も召喚も魔神もない。違う世界なの間違いないんだ。でもな、」

「うむ」

二人は同じものを見ていた。

「月は同じなんだ」

「うん」

「不思議だな」

「ああ。文字は読めなく言葉が通じるもの、お前がお前だけでなくエクリオスも一緒に召喚されたのも」

「そうか、それもそうだな……」

「ケイン、お前は寝ている間に召喚されたんだよな」

「ああ、そうだったな」

「俺は起きていた」

「覚えてるんだ？ 召喚された瞬間の事」

「うむ。俺はその時、座っていた」

一年F組の教室で。

朝のH・Rが始まる前の時間に。

「うん」

「ふつと変な感覚に襲われたと思つた次の瞬間俺はこの世界で立つていた」

「うーん……。よく分かんねえな

法男の方を向くケインの口元に笑みが浮かんできた。それはどんな笑みだったのだろう。

「うむ。俺にはこう感じられた。あまりにも都合が良過ぎると」

「うん、まあ、そうかな」

法男もケインの方を向いた。

「なあ、ケイン、俺達は本当にこの世界に来ているのだろ？」「

「え？ どういう意味？」

「うーん……。よく分からんが……」

「分からねえのかよ！」

「そうだな、帰る方法なんだが…… 例えば……」

ケインは再び真面目な顔になる。

「例えば？」

「死ねば元の世界に帰れる、とか、」

「なるほど。よし、ノリオ、試してみろ。そして、本当に帰れたか

どうか教えてくれ

「うむ、断る」

「けち」

ケインは笑っている。

法男も口元が緩む。ケインがいつものケインだったから。

トントン。

その時、ミレー＝ユとターニャは分厚い本に向かい、ケインと法男はサラティアのカードゲームに興じていた。

部屋を訪れたのは一人の兵士。

「ノリオ殿、お支度を」

法男は頷き、立ち上がる。

「ケイン、悪いが中座させてもらひ」

「お？ おう。じゃあ、続きは後でな」

ケインのその言葉は法男の動きを一瞬止めた。

「ああ、また後で」

笑みを浮かべて答える事が出来た。

その逡巡の意味を理解するターニャは立ち上がり、出て行く大きな背中に言葉を掛けようとした。

言葉は、出ない。

「ミレー＝ユ……」

「はー」

すでに泣きそうになつて居るターニャにミレー＝ユは優しく頷いて見せた。

ターニャも部屋を出る。

「お、おい、どうしたんだよ…」

訳が分からぬケインもターニャを追いかけ部屋を出た。早足で行くターニャにすぐに追いつき並んで歩く。

「おい、ターニャ、何があつたんだよ」

「戦いが始まるの」

「え？あー……」

ケインは自分がこの世界に呼ばれた理由を思い出した。

「な、なんだよあれ……」

ターニャとケインは物見台に並んで立っていた。

「ジャイアントが……三体も……」

一回！」とに強力になつていつた敵。予想は出来ていた。

「ジャイアント？あの、でかいのか？」

「うん……」

しかし、実際に見てしまふと絶望感に押しつぶされそうになつてしまふ。

「あんなバケモノ、人間じゃ勝てねえだろ……」

「うん……前の時ね、ジャイアントが一体でね、ノリオが倒してくれたの。でも、その時、ノリオも死ぬぐらいの怪我をしてね……」

涙声になつてしまふ。ターニャは服の裾をぎゅっと握り、涙がこぼれ落ちそうになるのを必死でこらえた。

「ノリオは……ノリオは絶対に逃げたりしないから……でも……だから……今度こそ……」

それでも涙はこぼれてしまう。

「お願い！私には戦う力が無いから！でも、あなたには！」  
必死で声を張り上げケインを見つめる。  
いや、見つめようとした。

そこにケインの姿は無かつた。

階段を駆け下り、廊下を走り、駆け下り、走る。ミレーヌの部屋の前を通り過ぎ、魔方陣の部屋の扉を開ける。

エクリオスの足元まで来ると息を切らしながら見上げる。法男がかつて登ったルートが見えた。教えられてはいたけど一度も使った事がないルート。落ちたら怪我ではすまないその道を、迷わず登り出した。

急げ、急げ、急げ。

コックピットにたどり着いた時にはもうへとへとなつてしまっていた。それでも一息つく事なく起動させた。

ウーン……。静かなモーター音が部屋に響く。エクリオスは壁に向かって歩き出す。

「ケイン！」

ケインはビクつとする。エクリオスの足が止まる。後部を映すモニターにはミレー＝ユの姿。ブランの言葉が蘇る。

今から自分が壊そうとしているものを大切にしている人がいる。泣きそうな顔になつてしまふ。

悩む。

考える。

歯を食いしばる。

エクリオスは再び歩み出す。その背に再びミレー＝ユの叫びが投げ掛けられた。

「そつちはすぐに城壁になつてゐからーあつちーあつちなら庭になつて門の方に出られるからー！」

ケインはエクリオスの上体を回転させ、直接ミレー＝ユを見た。指差す姿が心に響く。ハッチを開けた。

「ありがとうー！ミレー＝ユさん！」

微笑み頷く姿はケインに勇気をともす。

エクリオスは向きを変え、前傾姿勢になつた。タイヤが回る。一気に加速する。腕の外側を前に突き出す。壁が近づく。激しい衝撃。エクリオスは飛び出した。

近づいてくる三つの巨大な影。だが、戦う前から諦める者はいなかつた。

「俺が三体とも相手しよう」

陣の先頭。ノリオとアトロス。

「だが、さすがに三体は……」

「任せろ。この前のような無様な真似は決して見せない」

「ヨシオカ……分かった。だが、我々も出来る限りの手伝いはさせてもらひ。皆、いいな！」

応！親衛隊も力強く拳を突き上げる。

法男も頷き拳を握りしめる。

覚悟は決まつた。必ず勝つてみせる。絶対に守り抜いてみせる。影が近づき、その巨大な姿を見せつけてくる。

法男は剣を抜く。駆け出そうとした時、サラティア軍の後方からざわめきが聞こえてきた。

アトロスは振り返る。見えたのは開きつつある城門であった。

「おい！何をしている！」

アトロスは叫ぶが城門は止まらない。

そして、姿を現した。

一步、また一步。

サラティア軍はエクリオスを呆然と眺める。襲撃してきた魔物達も、また。

法男は足が止まったジャイアント達を見据えつつ、背中から伝わつてくる地響きを感じていた。

「おーい、道を空けてくれ！」

スピーカー音が戦場に響く。エクリオスの前方に位置していた兵士達は慌てて移動する。道が出来た。道の向こうに小さなちゅんま

げの背中が見えた。

ケインはニヤリと笑う。

エクリオスは前傾になり、動き出す。左腕を上げた。銃身が光る。狙いは一番前のジャイアント。発射。連射された弾丸はジャイアントの顔面を貫いていく。崩れる巨体。

エクリオスはちょんまげの横を通り過ぎる。

「ノリオ、おとなしくそこで俺様の勇姿に見とれてな！」

法男は笑い、自分を追い越していく背中に頷いた。

すでにエクリオスは次のジャイアントの懷に飛び込んでいた。鳩尾目がけて右腕を突き出す。当たる瞬間、拳だけが加速した。ジャイアントの体にめりこむ右拳。次の瞬間には元の位置に戻る。そして、また加速して伸びる。

何度も繰り返される衝撃はジャイアントの体を変形させていく。そして、倒れた。

次だ。ケインはモニターに視線を移す。そこにビデアップのジャイアントの顔が映っていた。

「しまった！」

ケインはエクリオスを反転させる。が、遅い。迫ってきていたジャイアントに組み付かれてしまう。組み合ったエクリオスとジャイアント。

ケインの得意とする戦法はヒット・アンド・アウエイであり、とつ組み合いは苦手であった。とつさに切り抜ける戦法を思いつけず、パワーを上げて押し切るしかない。だが、ジャイアントの筋力はエクリオスのパワーに負けていないようだった。

タコメーターはレッドゾーンに入る。エクリオスの腕から軋む音が聞こえる。ケインは焦った。

その時、背中の方からカツーン、カツーンという音が聞こえてきた。

「な、なんだ？」

思わず出てしまった声とは裏腹に、何が起こっているのかケイン

には分かっているような気がしていた。次に見えてくるであろう光景も。

カツーン、その音がすぐ横で聞こえたかと思うとケインの田ん空飛ぶちゃんまげの姿が飛び込んできた。

法男は前回の戦いで剣を折られた事を恥じていた。

確かにジャイアントの体は硬かつたかもしれない。しかし、ブランの剣は最高の剣である。折れた原因は己の未熟な腕。

もつと速く。

もつと強く。

もつと正確に。

ノリオは剣を振り下ろした。

消えていく圧力。崩れ落ちていく巨体。ケインは田の前で起つた光景に放心してしまう。

「すげえ……」

地面を転がり、起き上がったちゃんまげは振り返り、ケインの方を見た。ニヤリ、とケインに親指を突き出してみせる。

「ちつ、やつてくれるじゃねえか」

ケインも笑い、ハッチを開ける。

「おい、ノリオ、いい所持つていつたつていい気になつてんじゃねえぞ！これから俺様がもつと活躍してくるから！お前は休んでな！」

法男は笑つて頷く。

ゴブリンとオーク達の災難が始まる。

「魔神……」

「魔神……か？」

「ヨシオカが連れていた子供だよな……？」

兵士達は呆然と魔物の群れを跳ね飛ばしていくあまりにも異質な姿を眺めるしかなかつた。

「ヨシオカ、あれは……」

アトロスが法男に近づいてきて声を掛ける。

「うむ。ケインだ」

「あ、ああ。いや、あれは……」

「うむ」

アトロスすら田の前の光景を飲み込めないでいる。法男は説明する良い言葉が思いつかないので力強く頷くだけだつた。

「おお、おお、すげえな、ありや。あれがケインが言つていたW・Hか。うつひょー！すつげえー！」

街を通つて行く異様な巨人に驚いた街の人々も城門近くに集まり外で起こつてている事を見つめていた。

「プラン……」

はしゃぎ、ご機嫌な様子のドワーフに話し掛ける美しいエルフ。プランは振り向くと眩しそうな表情になつた。

「久しぶりだな、ミレー＝コ。元気してたか」

「相変わらずよ、プラン。エルフは変わらない。あなたはちょっと老けたかしら」

「そうか？まだ若い者には負けねえぜ？ターニャちゃんが招待したあいつらにだつてな」

プランは城門の外を指差す。

ミレー＝コの顔が憂れいを帯びる。

「魔神召喚は……成功しなかった。その人が残した魔方陣はあの人以外には使う事が出来ないのかしら……。それとも、長い年月がその輝きを衰えさせたのかしら……」

遠い目になるミレー＝ユをプランは暖かい目で見つめる。

「何言つてんだ? ミレー＝ユ。お前は相変わらず馬鹿だな。エルフは本当に変われねえんだな」

がつはつは。

「え?」

ミレー＝ユはきょとん、とプランを見つめる。

「見るよ、ミレー＝ユ。あの魔神なんかよりすげえ連中が現れただやねえか。ターニャちゃんはレヴィよりもすげえ魔法使いだつたつてだけの事だよ」

「え……」

ミレー＝ユは門の外を見る。

そして、微笑んだ。

「そうね、ブラン。きっとあなたの言つ通りね……」

間違いねえぞ。」 うしてお前をあつさり外に連れ出す程すげえ連中なんだぜ?

「さて、そろそろ戦いは終わりそうだ。俺は奴らを迎えに行くとしよ。あれを近くで見たいしな。ミレー＝ユ、お前も行かねえか?」

あつと言つ間に壊走していく魔物達。戦場にはもう敵影は無い。

「……」

ケインはコンソールパネルを操作する。エクリオスの背中、リュックの上あたりが開き、何かを発射した。

「ケイン!」

法男が呼びかけてくる。ケインはハッチを開いた。

「ケイン、お前の勇姿はしっかりとこの目で見届けた。さあ、帰ろ

「う

ケインは法男の言葉を聞きながら操作を続ける。

「ああ。先に帰つといてくれ。俺にはまだやる事が残つていいから」「ん？」

動かないエクリオスに疑問を感じ、法男はエクリオスを登つていった。既に慣れた通路である。

「何をやつてるんだ？」

法男はケインが見ているモニターを覗き込んだ。そこには上空から映しだされているらしく、数体のゴブリンの姿があった。

ケインはコックピットに突然現れた法男の姿にも動じる事無くモニターを見つめ、手を動かしていた。

「ああ、偵察用の小型ヘリを飛ばした」

「ふむ？」

「敵の本拠地を突き止めるのは戦いの基本だろ？」「なるほど」

法男は理解した。

「俺はここでこのまま操縦しなきゃいけないから。先に帰つて皆に説明しといてくれ」

「分かった」

降りようとする法男に声が降つてくる。

「それとな、ミラー・コロさんに謝つておいてくれ」

「うむ？」

それで声は途絶えた。降りながら法男はケインと共に聞いたブランドの言葉を思い出していた。

「なるほど。

遠くからじわじわ近づいて来るブランドとミラー・コロの姿が見えた。うむ。事情は説明しておいつ。

しかし、ミラー・コロに謝るのはお前がするべき事だな、ケイン。

お前がハーネーに怒られたるといふ事などとも見てみたいからな。

## 最終話 ハール・ハイド

あの山の向こう。裂け目みたいな洞窟。詳しい座標はエクリオスに記録されてるぜ。

会議の結論は明らかだった。しかし、それ言い出す者は限られていた。賛成という意志すらほとんどの者が示す事が出来ないでいる。

「じゃあ、俺行つてくるから」

「ま、待て。一人でか？」

いかつい顔が慌てて言った。欲しい発言があつたからだ。

「うん」

「いや、俺も行こう」

「えー？俺一人で十分だつて」

「洞窟だつたな？エクリオスが入れない場所があればどうする？」

「うつ……」

ケインが返しを見つける前に法男は言葉を続ける。

「決まりだな。俺とケインで敵本陣を攻める」

「私も行こう」

アトロスも発言してみた。

「うむ。確かにアトロス殿はとても優秀な剣士だ。しかし、あなたはただの剣ではない。ここに残り、サラティアを支えるべきだろ？」  
満場一致で却下された。

エクリオスの威力を目の当たりにした者はこうこう意見を持つか

もしれない。

「あ、あの、ウエスト様の乗り物を倒せる魔物などなかなかないでしよう。攻めず、守る方が安全なのは……」

発言した者も分かつていて。しかし、選択肢を消す、といつ手順を必要だと感じたのだ。

「それでは戦いは終わらない。いや、あの乗り物が壊れでもしたらそれで我々の敗北となるだろ?」

一礼して引き下がる。役割を終えて。

サラティアの運命を決断し決定するのはただ一人。ポートロスが口を開く。

ミレー＝コの部屋にいつもの顔が並んでいた。

「敵襲の間隔がだんだん長くなってきて、敵がだんだん強くなってきたいるのはあの術をやつてるからじゃないかな……」

ターニャが難しい顔で言ひ。

悪魔の刻印。デビル・スタンプその言葉を出す事すら忌避してしまつ古の術。

「ふむ。つまり、早ければ早い程敵の戦力が整っていない、と」

「うん……。そう、だと思つ……」

ターニャは自分の考えに自信が無い訳ではなかつた。そこから導き出される結論が怖かつたのだ。

「じゃ、明日出発だな」

「うむ」

ターニャもうつむいて頷くしかない。

「ミシオカ様、ケイン、気をつけ下さいね。決して無理はしないよつこ。危ないと思つたらすぐに引き返すんですよ」

ミレー＝コは心配そうな表情で言ひ。

「む」

「うん、分かつたよ、ミラー。絶対無理はしないって誓つよ」

法男は心とも口とも言ひ難い微妙な返事をし、ケインはヒヒヒヒと頷く。

「そうね、ケイン、そつしてね。ヨシオカ様もですよ？」

「危ない時には引くんですよ？」

「む」

「無茶しちゃ駄目ですよ？」

「む」

「むー」

ミラーは口を尖らせる。

「大丈夫だよ、ミラーさん。僕がついてるからさ。敵の親玉をさつせと見つけたせつせとやつつけちゃうからさ。法男なんて見てるだけだよ」

あれ？ ミラーはケインを見る。

「……ケイン？ 無茶はやめてって話をしてるのよ？」

「うん、分かつた。無茶はしない。俺とエクリオスは無敵なんだぜ？」

「ここに答えるケイン」「ミラーは不安そうになる。

「ケイン、えーと……、何て言つたらいいのかしら……」

「うん！ 任せて！」

ぐつと拳を握りしめるケイン。言葉を失うミラー。

勝者、ケイン。

まんまとミラーの追求を逃れた法男。

ふさぎ込んでいるター二ヤ。

そして、ノックの音が。

「ポートロス陛下が皆様とお食事を一緒に、との事です」

アラニアだった。すでにケインとも面識がある。ケインが生活する為のあれこれはアラニアが面倒をみていた。

「お、」飯

ケインは食事の言葉にのみ反応し、すでに「機嫌になつて」いる。

「悪いが俺は辞退させてもらおう」

法男の拒絶にもアラミアは動じない。予想していた反応だったのだ。

「ノリオ様が兵舎で取られていた量は軽く」用意出来ますよ？」

「お招きに預からう」

法男は立ち上がる。

「じゃあね。食べ終わって時間があるようならまた、」

ミレー・ユの言葉はケインに遮られた。

「じゃ、行け」ミレー・ユさん

「いえ、私は……」

「あれ？ アラミアさん、みんな、だよね？」

アラミアは微笑み、頷く。アラミアとケインの仲は良好だった。

「はい。ケイン様。もちろんミレー・ユ様も招待されますよ」

「あ、あの、私は……」

「だつてさ、さ、行け」

なんと、ケインはミレー・ユの手を取り歩き出した。引っ張られ歩き出すミレー・ユ。なんと、その顔には照れたような笑みが浮かんでいるではないか。

残る三人も部屋を出る。

アラミアは前を行く一人を見て笑顔になる。そして、前を見たまま隣を歩く法男に話し掛けた。

「微笑ましいですね」

「うむ」

「……ノリオ様、私達も手をつなぎましょうか」

「いや」

間髪入れずに答える法男。

「私どじや、お嫌でしたか？」

「いや。俺はケインのような子供ではないのでな」

その答えを聞いてアラニアはくすくすと笑う。

「どうした？」

「ノリオ様、手と手を繋ぐのは子供だけがする事とは限らないんですよ？」

「……ひ……む」

言葉を詰まらせる法男を見てアラニアはまたくすくす笑う。

そんな一人を少し離れて見ていた最後尾のターニャは顔を曇らせていたのだった。

ポトロス、アトロスが迎える。礼は無用。皆、それぞれ席に着く。豪華な食事が次々と運ばれて来る。ポトロスが短い祈りを唱え、最後の晩餐が始まった。

「ヨシオカ、いつ出発するのか決めたのか」

アトロスが問う。

「うむ、明日だ」

法男の後ろにはワゴンが用意されており、法男の前の皿が無くなるはしから追加されていく。ワゴンの後ろにはワゴンが用意されており、ワゴンが空になり次第交換されていく。

「明日か……。急だな。準備とか大丈夫なのか？」

「その事なんだが、頼みがある。ケインの話によるとエクリオスで半日はかかるそうだ。少し、食べる物と飲み物を用意して頂けるとありがたい」

「分かった。が、少し、でいいのか？」

アトロスは笑う。その目は次々と追加されていく皿を見ていた。

「うむ、言い直そう。出来れば持てるだけ頼みたい」

笑い声が部屋を包む。ポトロスも愉快そうに笑っていた。その視線はケインに移る。笑い、元気に食べている姿に胸を刺される。

「君達には本当に申し訳ない事を頼んでしまったと思つていい

ポトロスの言葉に皆は静まり、注目する。

「気にすんなつて」

ケインは陽気に声を掛ける。食事と気楽な雰囲気にポトロス相手でも緊張はせずにすんでいた。

「だが、この國の者ではない、この世界とは違う世界から来ているあなた達に一番危険な役割を負わせてしまった。この國の長として心から詫びを申し上げる」

ポトロスは頭を下げる。

「うむ」

「ああ、任せとけ」

二人は力強く頷いた。

ポトロスは法男とケインの表情を見てふりつと安心したように息を吐く。

「ありがとう、一人とも。しかし、そうは言つてもウエスト殿のような幼き者に危険な場所へ行つて頂くといつのは心が痛むのだよ。くれぐれも自分の身を第一に、な」

ケインはもう、話に飽きて料理に手を伸ばしていた。

「確かに俺は子供だからさ、」

「え？ うん？ あら？ 三人が動きを止め、ケインを見つめる。もぐもぐさせていた。

「でも、俺は保安官だから」

もぐもぐ。

「とつぐに覚悟は決めている」

「じつくん。

「戦えない者の前に立つて戦うのは俺の仕事だから気にすんなつて。それに俺の事ばっかりだけど、ノリオだつて俺と二つしか違わないんだぜ？」

「ええ！」

「なんと」

「ヨシオカ……」

ケインの言葉は二人を絶句させた。

低い唸り声。

「ほう。本当にいたか」

「見つけた者には後で褒美をやらんとな」

凶悪な目が一人を睨みつけている。黒い鱗が不気味な光を放っている。巨大な翼は広げれば二十メートルにはなるだろう。

「従わせる事が出来れば城壁は無いも同然」

「異界の助つ人も飛び越えてしまえばいい。が、それはお前がこいつをねじ伏せられたら、の話だが」

「ふん、やつてみせるさ。こいつを倒せば俺は神になれる。これが俺の最後の戦いだ」

ゴブリンキング、メドーシュはワイバーンに向かつて突っ込んでいった。

闇色のエルフはその背を静かに見つめる。

エクリオスは城門の横に置かれていた。そのボディは折り畳まれており、コックピットは地面近くにあつた。

「気をつけてな」

見送りはター二ヤ、ミレー二ユ、ブラン、アトロス。

「持てるか？」

アトロスは大きなリュックを法男に渡す。見つめるター二ヤ。その仲にはター二ヤが作った料理も入っていた。

「ありがとう」

受け取る法男。ケインはハッチを開け、エクリオスに乗り込む。起動させ、立ち上がりしていくエクリオス。直立しても動きは止まら

ず、今度は仰向けに折りたたまれていぐ。手をついた、と思つと手の手首から車輪が現れた。

「おおー！ こりゃあ、見事だ！」

ブランははしゃぐ。ミレーーユは浮わついた気分になれなにようで、じつと見つめていた。

「ノリオ！ 乗れよ！」

法男は苦もなく登ると、コックピットの横、肩辺りにしおりこみでつまづき場所を見つけ座り込む。

「じゃあなー！ ちょっと行つてくる！」

手を上げるケイン。法男も手を振る。

「死ぬなよ！」

「武運を！」

「氣をつけてね！ 絶対に帰つてきてねー！」

ミレーーユの声にケインは答える。

「ああ、約束するぜ！」

エクリオスは快調に走る。

流れる風景。葉を繁らせた木々。元の世界でも見たような、初めて見るような。時折、小動物も顔を覗かせる。狸つぽいものやら狐つぽいもの。自然の美しさは少年達の心を惹きつける。

「のどかだな」

「うむ」

「こここの世界も……」

ケインの言葉はそこで途切れた。法男はケインを見る。遠い目をしていた。

自分を見ている法男に気がつくケイン。真面目な顔で頷いた。

「ああ、分かった、法男」

「うん？」

「メシにしよう」

法男も頷く。

エクリオスの上でリュックの中身が広げられる。

「ここからこつちは俺の分だからな。手を出すなよ  
和やかに昼食を取る一人。

「なあ、ノリオ。お前、元の世界じゃ何してたんだ?」

「学生……、学校は分かるか?」

「ああ、俺の世界にもあるからな。俺はもう、行つてないが」

「ふむ。保安官は大変だな」

「本当に大変なんだぜ……。任務が終わっても訓練、トレーニング、  
遊び……。勉強と寝る時間なんて無いぐらいだぜ」

「なるほど」

ノリオは微笑む。

「だが、じつに来てからはのんびり出来ているようだな

「ああ」

ケインも笑う。が、ふつと表情が消え、ぼうっとして呟く。

「じつちの世界にも学校はあるのかな……」

昼食も終え、エクリオスは再び進み出す。タイヤで進めない場所  
では手足で登り、障害がある時には直立して壊しながら進む。  
そして、エクリオスは歩みを止めた。

目に「写るのは裂け目のような洞窟。

法男とケインは顔を見合せた。

「ノリオ、覚悟はいいか?」

「うむ」

「よし、行くぞ!」

「いや待て」

エクリオスを進ませようとしたケインをノリオは制する。

「なんだよ、いつたい」

ケインは不服そうだ。

「ミレーークに言われた事を忘れたのか？」  
「これは慎重にいこう」  
はつとするケイン。

「分かった。何か作戦はあるか？」

「……なるべく見つからないようこじょう」「ひ

「よし、分かった。で、どうやって侵入する？」

「……あそこから、エクリオスで、なるべく静かに」

「決まりだな」

「うむ」

ケインは操縦桿を握り、声をひそめて法男に囁く。

（行くぜ？ノリオ、静かにしてろよ？）

（うむ）

（よし、発進！）

ズシーン、ズシーン。

洞窟の中はパーティクになっていた。逃げ惑つ大小様々なゴブリン達。オークやジャイアントの姿は無かった。

「作戦は失敗かもしけないな」

「うむ。作戦を若干変える必要がありそうだ」

「どうする?」

「親玉を探そう」

「よし。悪魔だつたな」

ケインは周りをきょろきょろと見回す。広い空間が奥へと続いており、そこかしこに枝道が見える。枝道はエクリオスでは入れそうにない広さのものが多い。

「エクリオスで行けるところまで行つてみるか」

「うむ」

ケインはライトを点けた。光が洞窟を照らす。

「行くぜ」

エクリオスは闇に向かつて歩き出す。

「いやあ、見事な大穴だった」

「すごかつたのよ?」う、ギューンって、バーンって

プランにお茶を出したミレー＝ユは、身振り手振りで説明する。本を抱えたターニャはそんなミレー＝ユを見てくすりと笑う。ターニャがここにいるのはもちろん、ケイン達の帰還の手がかりになる物を探す為である。彼らが自分達の為に戦ってくれている。それ

ならば自分は彼らの為に出来る事を精一杯やろう。ターニャはそう強く思つていた。

「それで思い出したがあの時の、ケインがミレー＝コに謝つてる姿ときたら本当に……」

くつくつくつとブランは笑つた。

「ちょっと、ブラン？ あなたのせいでしょ。ひどいじゃない、子供を騙すなんて」

「いやあ、俺は本当にそう思つてて、親切に忠告したつもりだったんだがなあ」

「違うわよ。私が大切にしてるのはあの部屋じゃなくて……」

ミレー＝コの言葉はそこで途切れた。ブランも続きを促そつとはしない。

「魔方陣？」

ターニャが口を挟んでしまった。

「え？ え、ええ、まあ、そうね……」

ミレー＝コは口ごもりながら、何故かブランを見た。

「四〇〇年前はあの魔方陣を使って魔神を召喚出来たんだよね……」

ブランもミレー＝コを見た。

二人は思い出していた。あの戦いを。勝利に導いたあの男を。

狭くなつていく洞窟。

エクリオスが身を縮めだし、法男がそろそろ単独行かと思い始めた時、急に広い場所に出た。上から太陽の日差しが差し込む。見上げると天井が無かつた。どうやら火口のような場所らしい。そして、入つて来た所以外に出口は無かつた。

そこに、いた。

巨大な翼を持つ竜。それにもたれ掛かるように寝そべる巨大なゴブリン。少し離れて座り込んでいる真っ黒いエルフ。

その、三つの存在は眠りこけていた。

法男はケインを見る。頷くケイン。法男はエクリオスを降りていく。

地面に着いた時、闇色のエルフが目を覚ました。

彼は目に写る法男とエクリオスを認識し、ニタリと笑つた。

「ほう……？お前らが異界の人間か。これはこれは

「お前が悪魔か！？」

ケインが叫ぶ。アーメスは視線をコックピットに上げた。

「おや、そっちが本体か。違うよ、かわいい戦士さん。私はただのエルフだよ」

ケインの声に残りの二体も目を覚ました。メドーシュは大きく伸びをし、ワイバーンは大きな欠伸をした。

「うーん……良い朝だ」

「メドーシュ、もう昼を過ぎていいようだ。お密さんも来ている

「ほう？珍しい。何の用だ？」

メドーシュは一人を、エクリオスを見ても動じない。

「悪魔を探しているらしい」

「へえ……」

メドーシュは笑う。

「知っているのか！？」

再び問うケイン。

「……知っているんだろ、アーメス。どこにいるのか教えてやれよ

「ふふ……、ここにいるよ」

「何！」

ケインはエクリオスの左腕を上げ、周りを見回す。もちろん、他には何者もない。

「騙したな！」

レイル・ガンの照準を笑つていてるアーメスに合わせた。

「聞きたい事がある」

それまで黙つて成り行きを見つめていた法男が口を開く。

「……何だ？」

「そここの魔物の額にある模様は誰が付けた？」

アーメスの目がすうつと細くなる。メドーシュがすう一つと静かに息を吸う。

「……私だ」

抜刀した法男が一気に距離をつめる。アーメスに迫った法男にメドーシュの拳が唸りを上げて襲い掛かる。躊躇法男。レイル・ガンが発射された。風が巻き起こる。ワイバーンが巨大な翼で一人を庇つていた。翼には傷一つついていなかつた。

「君達は悪魔に用があるのだろう？」

アーメスはまだ笑つていた。

「彼なら君達の後ろにいるのに」

「騙されないぞ！」

ケインが叫ぶと同時に背後から爆発音。モーターには唯一の出口が塞がっていく様子が映し出されていた。

「……ちいっ」

ちょっとぴり焦つたケインはレイル・ガンを乱射した。アーメスとメドーシュは躲しながらワイバーンの背に乗る。近づくとする法男をワイバーンの爪と尻尾が邪魔していた。

凄まじい風圧と共にワイバーンは浮かび上がる。

「お客様のお相手をしてあげたかったのだが、我々にはする事があるので失礼するよ」

「客人！まあ、そこでゆっくりしていってくれ！」

上昇していくワイバーンにケインはレイル・ガンを発射するが撃ち落とす事は出来なかつた。

「くそ！」

ケインは崩れた出口を見た。左腕を構える。

「法男！急いで追いかけるぞ！」

頷く法男。レイル・ガンが発射された。

激しい音を立てて崩れていく周りの壁。出口はさうに固く閉ざさ

れてしまった。

地道な作業が続く。石を一つ一つ取り除いていく法男とエクリオス。

「あのエルフが悪魔だったのかな、黒かったし」

「お前の世界の悪魔は黒いのか」

「そうそう。黒くてつるつるピカピカしてる。ま、想像の中の存在だけどな」

「ふむ。俺の世界の悪魔も空想上の産物だな。蝙蝠のような羽がつたり緑色をしていたり動物だったり。形はいろいろらしい」

「それなら僕はそっちの子の世界の悪魔に近いって事だね」

全身が総毛立つ。この世ならぬ邪悪。精神を凍らせる原初の恐怖が一人を襲う。

法男は振り向く。そこには朧な影が。背中を冷たい物がつたう。

ケインは後部のモニターを見た。何も写っていない。慎重にゆっくりとエクリオスを反転させる。そこにいるものを刺激したくなかったように。そして、その目に影が写しされる。震える膝。

「ハツ！全然つるつるピカピカじゃねえじゃねえかよ！」

レイル・ガンをその影目がけて数発撃ち込んだ。影は消え、少し向こう側に再び現れる。

「ひどいな、いきなり撃つなんて。僕らはこの世界じゃない世界から召喚された仲間じやないか」

「何！」

「あの、エルフにか

ケインも法男も少しづつではあるが田の前の影に対する恐怖を克服しつつあつた。

「そう。あの、アーメスに」

「それで契約したんだな」

ケインは照準を合わせつつ問う。

「いや。僕ら悪魔は契約なんてしないよ。彼が面白そうだったんで協力しただけだ」

影は愉快そうに揺らめく。

「……どういう事だ？」

「いやあ、傑作なんだよ。彼は僕を召喚しといて、こんな小物しか出せないなんて、とか言いながら落ち込んでるのさ。だったら僕の世界の王様を呼び出せばいいじゃないか、と。その為の力をあげたのさ。僕の『魔』をね」

「お、お前は小物なのか」

「そうだよ。悪魔の中でも小さな力しか持つてないか弱い存在だよ。しかも、アーメスに僕の中の『魔』をほとんどあげてしまったから、ここにいる僕なんて残りかすみたいな物だよ」

ゆらり、ゆらり。

「だからね……」

影がはっきりしてくる。

「君達にも……」「

真っ黒いサンショウウオが一本足で立っていた。

「僕を殺す事が出来るかも知れないね」

その体が膨らむ。顔の部分は他の所よりもさらに大きく膨張していく。瞬く間にエクリオスの倍ほどの大きさになつた。巨大なオタマジャクシが一人を見下ろす。

法男はその足目がけて剣を叩きつけた。ゴムのような感触。衝撃は吸収され、剣を弾き返す。足が持ち上がる。法男は後ろに飛び退いた。

ケインはレイル・ガンを発射した。結果は法男と同じ。まったく効果が無かつた。オタマジャクシの口が開いた。真っ赤な空間。そこから火の玉のような物が撃ち出されてくる。

「ちいっ！」

ケインは必死で避けようとする。しかし、エクリオスは前後の動

きは俊敏でも横移動はそこまで早くない。火の玉はエクリオスの肩をかすめてしまう。そして、撃ち出された火の玉は一発ではなかつた。

エクリオスの膝を破壊した。腹を穿つた。腕をもいだ。  
コックピットを貫いた。

叫ぶ暇もなかつた。

見る影もない姿になつてしまつたエクリオス。

ぐらり。

倒れるかと思つたエクリオスは薄れ消えてしまつた。  
法男は駆ける。エクリオスが、ケインがいたその場所に。  
何も、無い。

「へえ？不思議な現象だね」

悪魔の声が聞こえる。

「君達はかなり遠い世界の人間だからかな」

ケインはもう、いない。

「知つてる？召喚つてね、世界と世界をつなぐトンネルを開けるよ  
うな物なんだ。とつても大変でね、たいていは近い世界に小さいト  
ンネルを開けるのが精々なんだよ。ここからは、魔神と呼ばれる連  
中がいる世界とか僕らの世界ぐらいが一番近いかな。それが、四〇  
〇年前は短いけど巨大な穴を。今回は本当に小さなわざかな穴だけ  
ど果てしなく長いトンネルを。多分、小さ過ぎて遠過ぎたんだろう  
ね。だから、不完全な召喚になつてしまつたんだろう。よく分から  
ないんだけど、もしかするとあの子は自分の世界に帰つたのかもし  
れないね」

ケインは自分の世界に無事に帰つたのだろうか。

それなら。

泣く必要はないだろ？。

悲しみを感じる必要はないだろう。

自分がやるべき事を果たすのみ。

「君も自分の世界に帰りなよ」

法男は飛んで避けた。自分が居た所に大穴が出来る。次々と飛んでくる火の玉。それを避けながら悪魔に近づいていく。

斬りつける。結果は変わらない。

落ちてくる巨大な足。避けると同時に剣を突き立てる。むなしく弾き返された。そこにもう片方の足が飛んでくる。法男は蹴り飛ばされ、壁に叩きつけられた。

激痛。うまく体を動かせない。真っ赤な口が開いていくのが見えた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6666x/>

---

サムライ・アタック

2011年11月24日22時49分発行